

2025年度
日本語教育実習（国内・国外）
報告書

愛知県立大学日本語教員課程

まえがき

2025 年度は愛知県立大学日本語教員課程「日本語教育実習(国内)」に 10 名、「日本語教育実習(国外)」に 5 名の学生が参加しました。「日本語教育実習(国内)」は 1 年にわたる長期間の開講で、学外での活動を数多く取り入れています。「日本語教育実習(国外)」は前期集中講義の短期間ながら事前の準備から現地での実習まで非常に内容の濃いものとなっています。このような授業での、専攻が異なる学生やこれまでの経験・背景が異なる学生との協働学習は、互いに刺激を受け、印象深い経験になったことと思います。

本報告書には、学生たちの各種活動をとおした学びが凝縮して記載されています。お手に取ってくださったみなさまに、学生たちの学びの軌跡をご覧いただけましたら幸いです。

学生の見学、調査、活動参加や協働学習にご協力くださった関係のみなさまのお力添えにより、このような学びの場をつくることができました。国内でご協力くださった公益財団法人愛知県国際交流協会、東海日本語ネットワーク、及び地域日本語教室のみなさま、本学日本語クラスの担当の先生方や学習者のみなさん、また、国外でご協力くださった甲南大学と台湾東海大学の実習生及び先生方、台中 YMCA 教室の大カタ加先生、台中市東區長青学苑教室の賈志琳先生、国立暨南国際大学附属高校の洪秀萍先生および、全ての学習者のみなさんに、深く感謝いたします。

外国語学部国際関係学科 教授 東弘子

外国語学部国際関係学科 講師 千葉月香

日本語教員課程履修規程

第1条 愛知職立大学学則第43条の規定に基づき、本学の外国語学部、日本文化学部、教育福祉学部の学生で日本語教員課程の履修を希望する者の履修科目及び履修方法は、この規程による。

第2条 日本語教員課程を修了するためには、別表1に従い、言語と教育12単位、言語14単位、言語と社会4単位、言語と心理2単位、社会・文化・地域2単位を含む計36単位以上を修得し、卒業しなければならない。それぞれの科目区分に相当する科目については別表2に定める。

第3条 この課程の授業科目の履修により修得した単位のうち、各学部履修規程により当該学科の授業科目と同一の場合は、卒業単位に算入する。

第4条 日本語教育実習を履修するには、科目区分「言語と教育」から「日本語教育実習」を除いた8単位、および、科目区分「言語」と「言語と社会」からあわせて10単位以上の修得が必要である。

附 則

この規程は平成21年4月1日から施行する。

附 則

この規程は平成22年7月29日から施行し、平成21年4月1日から適用する。

附 則

(施行期日)

- 1 この規程は平成25年4月1日から施行する。
(経過措置)
- 2 改正後の日本語教員課程履修規程（以下「新規規程」という。）別表2の規定は、平成25年度以降の入学（再入学又は転入学をした者を除く。）から適用し、平成25年3月31日に在学するものについては、なお従前の例による。ただし、新規規程別表2中の「日本語教育実習」については、平成21年度以降の入学から適用する。
- 3 平成25年度以降に再入学又は転入学をした者については、新規規程別表2の規定にかかわらず、当該者の属する年次の在学者の例による。

附 則

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

附 則

(施行期日)

- 1 この規程は、平成29年4月1日から施行する。
(経過措置)

- 2 改正後の日本語教員課程履修規程（以下「新規規程」という。）は、平成29年度以降の入学（再入学又は転入学をした者を除く。）から適用し、平成29年3月31日に在学する者については、なお従前の例による。

- 3 平成29年度以降に再入学又は転入学をした者については、新規規程別表の規定にかかわらず、当該者の属する年次の在学者の例による。

附 則

(施行期日)

- 1 この規程は平成31年4月1日から施行する。
(経過措置)
- 2 改正後の日本語教員課程履修規程（以下「新規規程」という。）は、平成31年度以降の入学（再入学又は転入学をした者を除く。）から適用し、平成31年3月31日に在学する者については、なお従前の例による。
- 3 平成31年度以降に再入学又は転入学をした者については、新規規程別表の規定にかかわらず、当該者の属する年次の在学者の例による。

附 則

(施行期日)

- 1 この規程は令和2年4月1日から施行する。
(経過措置)
- 2 改正後の日本語教員課程履修規程（以下「新規規程」という。）は、令和2年度以降の入学（再入学又は転入学をした者を除く。）から適用し、令和2年3月31日に在学する者については、なお従前の例による。
- 3 令和2年度以降に再入学又は転入学をした者については、新規規程別表の規定にかかわらず、当該者の属する年次の在学者の例による。

附 則

(施行期日)

- 1 この規程は令和4年4月1日から施行する。
(経過措置)
- 2 改正後の日本語教員課程履修規程（以下「新規規程」という。）は、令和4年度以降の入学（再入学又は転入学をした者を除く。）から適用し、令和4年3月31日に在学する者については、なお従前の例による。
- 3 令和4年度以降に再入学又は転入学をした者については、新規規程別表の規定にかかわらず、当該者の属する年次の在学者の例による。

別表 1

科目区分	必修単位
言語と教育	12
言語	14
言語と社会	4
言語と心理	2
社会・文化・地域	2
合計	36

別表 2

科目区分	必修単位	科目名	設置単位	科目開設学部・学科・専攻	
言語と教育	8	共通各論(日本語教育教材論)	4	外国語学部:学部共通	
		共通各論(日本語教授法)	4		
	4	日本語教育実習	6	日本語教員課程	
言語	8	共通各論(日本語学)	4	外国語学部:学部共通	
		共通各論(日本語文法論)	4		
		共通各論(日本語音声学)	2		
	6	言語研究入門	4	外国語学部:学部共通	
		共通各論(音声学)	4		
		共通各論(言語学)	4 ※1	国語国文学科	
		言語学			
		国語史	4 ※2		
		国語学特殊講義			
		国語学各論			
言語と社会	4	研究各論(民族言語研究)	2		国際関係学科
		研究各論(社会言語学)	2		フランス語圏専攻・スペイン語圏専攻 ドイツ語圏専攻・国際関係学科
		研究各論(多言語社会研究)	4	フランス語圏専攻・ドイツ語圏専攻 国際関係学科	
言語と心理	2	研究各論(異文化コミュニケーション)	4	フランス語圏専攻・ドイツ語圏専攻 国際関係学科	
		多文化社会とコミュニケーション	2	教養教育	
		発達心理学	2	教育福祉学部:学部共通	
		子ども家庭支援の心理学	2		
		子ども家庭支援論	2	教育発達学科	
社会・文化・地域	2	研究各論(多文化共生論)	4	フランス語圏専攻・スペイン語圏専攻 ドイツ語圏専攻・国際関係学科	
		研究各論(国際協力)	2		
		研究各論(地域社会論)	2		
		日本文化史Ⅰ	2	日本文化学部:学部共通	
		日本文化史Ⅱ	2		
		現代日本社会論	4	歴史文化学科	
		比較社会論	2		
		地域社会学	4		
		地域社会学Ⅰ	2	社会福祉学科	
		地域社会学Ⅱ	2		
		子ども発達支援論	2		
		多文化社会論	2		
		計	36		

※1 「共通各論(言語学)」と「言語学」の両方を履修することはできない。

※2 「国語史」、「国語学特殊講義」、「国語学各論」の3科目のうち4単位までは、日本語教員課程の修了必修単位に算入することができる。

2025年度日本語教育実習(国内)名簿

【実習生】

太田 真緒(おおた まお)	外国語学部 中国学科 4年
中島 莉子(なかじま りこ)	外国語学部 英米学科 4年
橋本 佳澄(はしもと かすみ)	外国語学部 英米学科 4年
後藤 愛佳(ごとう まなか)	外国語学部 中国学科 4年
小中 桃恵(こなか ももえ)	外国語学部 中国学科 4年
北村 しをり(きたむら しをり)	日本文化学部 歴史文化学科 4年
横江 隆弘(よこえ たかひろ)	外国語学部 ヨーロッパ学科 スペイン語圏 3年
里見 和奏(さとみ わかな)	外国語学部 国際関係学科 4年
永淵 琴子(ながふち ことこ)	外国語学部 国際関係学科 3年
西坂 茉那(にしざか まな)	外国語学部 国際関係学科 4年

【SA(Student Assistant)】

米山 茄穂(よねやま かほ)	外国語学部 ヨーロッパ学科 スペイン語圏 4年
村林 芽明(むらばやし ちひろ)	外国語学部 中国学科 4年
澤田 瑠依(さわだ るい)	外国語学部 国際関係学科 4年

【教員】

東 弘子(あずま ひろこ)	愛知県立大学 外国語学部 国際関係学科 教授
千葉 月香(ちば つきか)	愛知県立大学 外国語学部 国際関係学科 講師

【ゲスト講師】※講義日順に記載

村田 竜樹(むらた たつき)氏	愛知県社会活動推進課多文化共生推進室 あいち地域日本語教育推進センター 総括コーディネーター
継田 理恵(つぎた りえ)氏	いわくら日本語クラス 代表
西村 恵美子(にしむら えみこ)氏	いわくら日本語クラス 副代表
伊東 浄江(いとう きよえ)氏	NPO 法人トルシーダ 代理理事
伊澤 明香(いざわ さやか)氏	関西大学 准教授

2025 年度日本語教育実習（国外）名簿

【実習生】

後藤 愛佳（ごとう まなか）	外国語学部 中国学科 4年
小中 桃恵（こなか ももえ）	外国語学部 中国学科 4年
米山 茄穂（よねやま かほ）	外国語学部 ヨーロッパ学科 スペイン語圏 4年
横江 隆弘（よこえ たかひろ）	外国語学部 ヨーロッパ学科 スペイン語圏 3年
里見 和奏（さとみ わかな）	外国語学部 国際関係学科 4年

【教員】

東 弘子（あずま ひろこ）	愛知県立大学 外国語学部 国際関係学科 教授
---------------	------------------------

目次

まえがき.....	i
日本語教員課程履修規程.....	ii
2025年度日本語教育実習(国内)名簿.....	iv
2025年度日本語教育実習(国外)名簿.....	v

I. 国内実習

1. 2025年度「日本語教育実習(国内)」概要.....	2
2. 活動紹介.....	5
2-1. 地域日本語教室調査.....	5
2-2. 県大交換留学生の日本語クラス支援.....	13
2-3. 日本語ボランティアシンポジウム 2025.....	15
2-4. 外部講演会参加.....	17
2-5. Facebook.....	25
3. 個人レポート.....	34
4. SAからのコメント.....	48
5. 一年間の学び.....	49

II. 国外実習

1. 2025年度「日本語教育実習(国外)」概要.....	52
2. 「日本語キャンプ」報告書(東海大学版)からの抜粋.....	54
3. 台中日本語教室見学.....	59
4. 帰国報告会.....	60
5. 実習生ふりかえり.....	64
編集後記.....	69

I . 国内実習

1. 2025 年度「日本語教育実習（国内）」概要

西坂 茉那

① 概要と目標

本実習は日本語教員課程修了のために必修となる通年 4 単位の科目「日本語教育実習（国内）」であり、今年度は 10 名が履修した。期間中には、5 名の外部講師による講義のほか、愛知県国際交流協会(AIA)の見学、東海日本語ネットワーク(TNN)シンポジウムへの参加など、日本語教育について様々な視点から学ぶ機会が多く設けられた。

シラバスの中では、本実習の到達目標として以下の 6 つが挙げられている。特に 6 に関しては、授業やイベント後に実習生それぞれが振り返りを記入し、またそれを SA がまとめ、後日全体で共有する一連の流れが生まれていたことにより、特に実習開始時と終了時での変化が大きかった点として挙げるができるだろう。

1. 言語学習支援・言語習得に関する知識を深める
2. 日本語を母語としない人と「日本語」でコミュニケーションをする際に、相手が理解できる話し方を選択できる
3. 今起きていることについて、自身の考えを自身の言葉で伝えることができる
4. さまざまな人で構成される地域社会、日本社会に必要なことを考え、実行できる
5. 異文化コミュニケーションを通して、自分自身の中にこれまでに構築してきた文化、行動規範を理解する
6. 他者とともに、意見交換をしながら創り上げる能力と態度を身につける

本実習では日本語の知識や教え方を学習するだけでなく、多文化な場面で必要なコミュニケーション能力を習得することが重視され、それぞれが自身の言葉で学んだ内容を噛み砕き、またそれを人に伝える活動が多く行われていたように感じる。そして、その能力は日本語教育の場やそれ以外の様々な場面で活かすことができるスキルであり、2026 年 1 月 28 日(水)の授業の際には、学んだこと、後輩に伝えたいことなど実習生それぞれが今年度を振り返り、それをキーワードとして残した。(詳細は本報告書の 5. 一年間の学び)

② 2025 年度の実習内容

基本的に本実習は水曜日の 5 限目を開講されるが、今年度は休日に開催される学外実習(外部講演会への参加、AIA 見学など)参加のため、一部不規則的なスケジュールを伴っていた。

通年の授業スケジュールは後のページの表にまとめている。本節ではその中でも本実習の柱となっていた活動や特徴的な活動について簡単に触れる。

【修了生のつどい】

今年度の修了生のつどいは、本課程修了生6名が参加してくださり、実習参加の経験、日本語教育に携わる中での経験、それぞれのキャリアについてなど、様々な話を伺うことができた。愛知県立大学の日本語教員課程は、1999年から副専攻課程として設置されて以来、これまでに400名以上の卒業生を輩出している。その卒業生の中には、現在も国内外問わず多種多様な現場で活躍している方が多くいる。そして今年度の修了生のつどいに参加して下さった方々のように、後輩のために時間を割き、これまでの経験などについて話して下さる方もいる。今年度、様々な場面で人と人のつながりの重要性を感じる機会があったが、これもまたその一つであり、次は今年度の実習に参加した私たちがバトンを繋ぐ役割を担っていると言っていることができるだろう。

【地域日本語教室調査】

地域日本語教室調査は、今年度の実習の中で大きな軸の一つとなっていると言える。今年度も昨年に引き続き、参加する教室の選定から参加まで、そのすべてを実習生自身が行ったからだ。この経験は実習としてだけでなく、学生生活や今後のキャリアの中でも役立てることのできる経験として貴重なものであったと考える。また、10月29日(水)には地域日本語教室調査発表会をZoomにて開催した。実習生が参加している地域日本語教室の運営の方々をはじめ、参加者からの感想からも様々な学びがあった。(詳細は本報告書の2-1. 地域日本語教室調査)

【オープンキャンパス】

8月7日(木)と8日(金)に開催されたオープンキャンパスにて、日本語教員課程コーナーの展示を行った。日本語教員課程についてのみならず、地域日本語教室、また県大日本語クラスなどの情報についても掲示物を作成し、当日は訪れた高校生やその保護者に対して個別に説明を行った。また参加者の感想を書いてもらうコーナーでは、日本語教育に対する印象やその認知度についても知ることができ、オープンキャンパスが本実習や日本語教育について知るきっかけになっているという実感を得た。

【実習強化月間-11月】

今年度も前期から県大で実施されている交換留学生を対象とした日本語を学ぶクラスへの参加を行った。そして、11月にはその強化月間として2つ以上のクラスを実習生それぞれが選択し、全員が参加した。参加方法は、見学のみのクラスから実際に実習生自身が支援者として授業に参加したクラスまで様々で、異なるアプローチのクラスに参加することができたからこそ多くのことを学ぶことができる時間となったと言えるだろう。11月26日(水)には、授業内でそれぞれが学んだことをグループ、そして全体で共有した。(詳細は本報告書の2-2. 県大交換留学生の日本語クラス支援)

【年間スケジュール】

前期

4月9日	ガイダンス
4月16日	ガイダンス続き、自己紹介
4月23日	地域日本語教育概要 1: 愛知県における地域日本語教育の概要
5月7日	地域日本語教育概要 2: 民間団体と自治体の協働による地域日本語教育の状況
5月17日	AIA 見学
5月21日	地域日本語教育概要 3: 民間団体による地域日本語教育の状況
5月28日	地域支援の学びのまとめ
6月4日	訪問/活動場所を考えるワーク
6月18日	地域日本語教室調査 1
6月25日	地域日本語教室調査 2
6月28日	修了生のつどい
7月2日	地域日本語教室調査 3
7月9日	オープンキャンパス準備 1
7月23日	前期のまとめ
7月30日	オープンキャンパス準備 2
8月7日～8日	オープンキャンパス

後期

10月8日	後期ガイダンス
10月15日	地域日本語教室調査発表会リハーサル 1
10月22日	地域日本語教室調査発表会リハーサル 2
10月29日	地域日本語教室調査発表会
11月5日	発表会振り返り、県大留学生日本語クラスでの学びの準備
11月26日	県大留学生日本語クラス共有
12月3日	TNN シンポジウム ブース出展準備
12月6日	TNN シンポジウム参加
12月17日	「ことばの力のものさし」を活用した多文化多言語の子どものことばの力の評価
12月24日	シンポジウム振り返りまとめ、実習報告書分担
1月14日	実習報告書進捗確認 1
1月21日	実習報告書進捗確認 2
1月28日	まとめ

上記の授業以外に、TNN などが開催している外部講演会への参加が 2 回以上求められた。

2. 活動紹介

2-1. 地域日本語教室調査

中島 莉子・永淵 琴子

① 概要

実習生は地域日本語教室や高等学校の現場について、約3か月間にわたるボランティア活動を通じて調査した。その後、調査結果をもとに10月にオンラインで地域日本語教室の関係者や実習でお世話になった講師の方を招き、調査発表会を実施した。以下、地域日本語教室調査の事前準備、各実習生の調査内容、そして調査発表会の概要について報告する。

実習生が調査した地域日本語教室、高等学校とその開催地は以下の通りである。

実習生氏名	開催地	調査先の日本語教室名
太田 真緒	浜松市	浜北日本語教室
中島 莉子	名古屋市中区	グローバル愛知
橋本 佳澄	名古屋市北区	愛知県立城北つばさ高等学校
後藤 愛佳	名古屋市北区	愛知県立城北つばさ高等学校
小中 桃恵	名古屋市熱田区 東海市	Japanese Language Volunteer in Nagoya (JLVN) はじめての日本語教室
北村 しをり	春日井市	かすがいふれあい教室
横江 隆弘	名古屋市中村区	NIC 日本語教室
里見 和奏	長久手市	オープンにほんご
永淵 琴子	長久手市	にほんごで、はなそう!ながくてクラス
西坂 茉那	名古屋市中村区	DiVE CAFÉ にほんごクラブ

② 活動の流れ

○事前準備～調査発表のスケジュール

4月23日	講義 地域日本語教育概論 1:愛知県における地域日本語教室の概要
5月7日	講義 地域日本語教育概論 2:地域日本語教室の状況
6月上旬	訪問する教室の候補をリストアップ
6月上旬 ~7月上旬	教室への訪問アポイントメントの状況確認 教室の予備調査と発表
7月~10月	教室での活動・調査の実施
10月上旬	調査発表の資料作成
10月15日 10月22日	地域日本語教室調査発表(リハーサル)
10月29日	地域日本語教室調査発表(本番)

③ 地域日本語教室調査発表会

○事前準備(6月上旬～7月上旬)

地域における日本語学習者支援の実態を把握するため、調査訪問に先立ち、教室や高等学校の所在地域、学習者層、学習内容、支援体制、ならびにそれぞれが抱える課題や求められる支援について事前調査を実施した。そのうえで、実習生各自が地域日本語教室や高等学校を対象に訪問候補のリストアップを行った。教室調査の実施にあたっては、電話や電子メールを用いて各教室にアポイントメントを取得した後、各教室への初回訪問を行い、教室代表者やボランティアの方、及び、学習者へのインタビューをした。あわせて、実際にボランティアとして活動に参加することで、インターネット上の情報だけでは把握できない地域日本語教室運営や高等学校の授業運営の実情、学習者支援の具体的な課題を体感的に理解することができた。これらの「現場の声」、事前に収集した基礎情報、そして自身の活動を通して得た気づきを整理し、7月上旬に各自の教室に関する予備調査結果を授業内で発表した。

○各教室での活動・調査の実施(7月～10月)

7月～10月の間、主に夏季休暇を利用し、本格的にボランティアとしての活動と調査活動を開始した。実習生は各自参加した日ごとに、振り返りシート(わかったこと、課題、疑問に思ったことなど)に記録。授業では各自の振り返りに基づいてグループディスカッションを行った。調査活動は10月までだったが、現在でもボランティアとして引継ぎ教室にお世話になっている実習生もいる。

○地域日本語教室調査発表会

10月29日の授業では、約3か月間にわたる地域日本語教室や高等学校でのボランティア活動を通して得た学びを共有する報告発表会を実施した。本発表会はオンラインツール(Zoom)を用いて開催され、実習生がお世話になった教室関係者の方々、高等学校の教師の方々に加え、日本語教育に携わる多様な立場の方々にも参加いただいた。発表では、実習生が実際にボランティアとして活動する中で気づいた点や直面した課題、そこから得た学び、今後に向けた抱負について報告を行った。その後には質疑応答の時間を設け、参加者の方々から多くの質問や意見、助言をいただいた。普段、学外の方から直接コメントをいただく機会は限られているため、お世話になった教室以外の関係者の方々から寄せられた意見は、実習生にとって非常に貴重なものとなった。本発表会は、学生同士の情報共有にとどまらず、地域日本語教室の運営者やボランティア、日本語教育に関わる実践者など、さまざまな立場の方々に対して、学生の視点から見た現場の実態や課題を共有する場となっていたら嬉しく思う。以下に、発表会に参加していただいた方々から寄せられたコメントの一部を掲載する。

○地域日本語教室調査発表会に参加して下さった方々のコメント

- ・ 私にとってもいい学びの場となりました。名古屋市の地域日本語教室の連絡会など参加したりしているものの、実際、学生さんたちが参加されてのレポートはとても参考になりました。また、地域日本語教室だけではなく城北つばさ高校などの情報もわかり、今後うちの生徒

たちにも共有していきたい内容でした。

- ・ 城北つばさ、グローバル愛知、DiVE カフェ日本語クラブなど、確かに多様な教室に見学に行かれたと思いました。いわゆる地域の日本語教室に行った報告からも、その多様性は理解できたと思います。

④ 各実習生の活動報告



以下に実習生 10 名の活動報告と発表会後の振り返りを抜粋・転載する。スライドは各実習生が調査発表会で用いたものである。

《浜北日本語教室（実習生：太田 真緒）》

<p>参加報告②【支援者の様子】</p> <p>【支援者】</p> <ul style="list-style-type: none">・ 役割は教育関係ではない方がほとんど・ 他の支援者の方の授業を見学したり、実際に教えることでスキルをつけていく <p>ボランティアの万の思い：</p> <p>「説明をする際に英語を使ってしまわず、日本語を使うことで日本語のシャワーを浴びせ、日本語環境に慣れてもらいたい」</p> <p>→ 日本語で日本語を説明できるスキルが重要！ 自分自身の語彙力も試される！</p>	<p>日本語教室参加を通して</p> <ul style="list-style-type: none">・ 例文を示すことの大切さ ➢ 学習者の出身地や仕事関連の内容を取り上げると興味を持ってもらいやすい！・ ただ単に日本語を教えるのではなく、日本社会で生活するにあたって守るべきルールも伝えたい → 単に日本語を教えるだけの場所ではない ➢ 休憩時は事前に連絡を入れる・ 参加する学習者の人数が毎回異なる ➢ 学習者が及ばず突然連れてくる ➢ 欠席者が多すぎてせっかく支援者が準備してきても学習者がいないことも → 「カジュアルに参加できる」or「カジュアルすぎない」バランスが難しい
---	--

- ・ 開催地域：浜松市
- ・ 対象者：N5～N1 レベルの対応（子ども及び大人）
- ・ 活動目的：企業内での円滑なコミュニケーションや VISA の取得など多種多様な日本語の学習
- ・ 学習者の国籍：ベトナム、インドネシア、フィリピン等
- ・ 活動形態：レベル別グループ学習
- ・ ボランティア数：約 10 名
- ・ 実習生の振り返りより：日本語教室は単に日本語を学ぶだけの場所ではなく、日本社会で生活するにあたって守るべきルールも伝える場所だと学んだ。また、カジュアルに参加できる教室では、参加者の人数が予想しにくく、カジュアルすぎないようにバランスをとることが大切だと思った。

《グローバル愛知(実習生:中島 莉子)》

 今後の課題 	学んだこと <ol style="list-style-type: none"> 質問しやすい環境づくり → 学習者が安心して「わからない」と言える雰囲気をつくる ことが、学びの第一歩。 → 教える側の表情・反応・声かけひとつで、教室の空気は大きく変わると実感した。 学習者の「なぜ」に向き合う → 学習のレベルが高くなるほど「なぜそう言うのか」という背景まで伝えることが大切だと感じた。(前提条件を正しく伝える。) → 学習者の考えを聞き、共に考える姿勢が信頼と双方の成長を生む。
これからの社会 ・ 就職活動の高やビジネスの為の日本語教育の需要が増えると考えられる。	
日本語講座の課題 ・ 会話講座を需要の変化に伴い、ビジネスマナーを中心とした授業へと変えていく。 → 本曜日15:00~16:30「就活・ビジネス日本語」	
自分の課題 ・ 質問しやすい環境づくりが1番の課題。初対面の人とでも双方向に活発なコミュニケーションをすることを心がける。 ・ 今必要とされている日本語教育に目を向ける。需要に合わせた理解や知識を養う。	

- ・ 開催地域:名古屋市
- ・ 対象者:グローバル愛知の会員(現在就職活動中の学生、または会社員)
- ・ 活動目的:就職活動や試験、仕事の為の高度な日本語の学習
- ・ 学習者の国籍:中国、フランス、ミャンマー等
- ・ 活動形態:対話型、グループ学習(1人の先生につき4、5人の学習者)
- ・ 講師数:2名
- ・ 実習生の振り返りより:学習者の「なぜ」を大切にできるような環境づくりを重視されていると感じた。学習者とのコミュニケーションを軸に、信頼関係を築きながらお互いを尊重して教えることの重要性を学んだ。

《愛知県立城北つばさ高等学校(実習生:橋本 佳澄、後藤 愛佳)》

参加を通して	参加を通して
▷橋本 ・ 流暢に日本語が話せる＝読み書きができる ということではないことを実感した ・ 音で覚えていて、単語と結びついていない ・ 漢字に苦戦しており、記号のように形で覚えている生徒が多い ・ 少人数クラス＋支援員がいるため、置いていかれることなく安心して生徒が学べる環境だと感じた ・ 様々な場面で細かい配慮がされていることに気づいた	▷後藤 ・ この活動を通して、関わってくれた生徒の明るさ、積極さ。 ・ 言語指導員がいること、同じ母語の生徒がいることの大切さ。 ・ 同じ授業を受けている生徒の中でも、それぞれの日本語のレベルを把握し、適切な支援をすること。 ・ 支援の際にただ答えを教えるのではなく、どのように答えを導くか。

- ・ 開催地域:名古屋市
- ・ 対象者:愛知県立城北つばさ高等学校の外国ルーツの生徒
- ・ 活動目的:理解が追いついていない生徒への補助
- ・ 学習者の国籍:ネパール、フィリピン等
- ・ 活動形態:一斉授業
- ・ 講師数:授業者1人、言語支援員1、2人(授業によって人数の変動あり)
- ・ 実習生の振り返りより:話す力と読み書きする力を別のものとして捉えることを学び、細やかな配慮の大切さに気付いた。(橋本)
- ・ 生徒の明るさや積極性に励まされた。いかに一人一人に寄り添いながら答えを導くかの重要性を学んだ。(後藤)

《Japanese Language Volunteer in Nagoya (JLVN) (実習生:小中 桃恵)》

<h3>見学して感じたこと</h3> <ul style="list-style-type: none"> ●授業の特徴 <ul style="list-style-type: none"> 学習者と支援者が同じテーマでそれぞれのことを話す 絵・写真・実物・挨拶を活用しながら、途切れずに話す 学習者が支援者の話を真剣に聞く姿勢が見られた ●相手知らないことを伝える/自分が知らないことを聞く <ul style="list-style-type: none"> →本物のコミュニケーションが成立 →「話したい」という気持ちを引き出しているのではない 	<h3>まとめ</h3> <ul style="list-style-type: none"> ●支援者としての学び <ul style="list-style-type: none"> 学習者が話してみようと思う雰囲気づくりが大切 間違いを恐れずに発話できるよう、支援者の関わり方や態度を工夫する必要がある ●観察から得た気づき <ul style="list-style-type: none"> 2つの教室は異なる形態だが、支援者に求められる学習者に寄り添う姿勢は共通 ●今後に向けて <ul style="list-style-type: none"> 学習者の「話したい」という気持ちを引き出すために、本物のコミュニケーションを意識して関わる <p>参照https://www.city.nagoya.jp/kankobunkakoryu/cmsfiles/contents/0000080/80856/06-4.xlsx PowerPointプレゼンテーション</p>
--	---

- ・ 開催地域:名古屋市熱田区
- ・ 対象者:大人・ティーンズ(小5~高校生)
- ・ 活動目的:言語学習の場を作るため
- ・ 学習者の国籍:中国、ベトナム、タイ、フィリピン、ブラジル、フランス、アメリカ等
- ・ 活動形態:支援者3人に対して学習者6人の一斉授業
- ・ 講師数:授業者1人、アシスタント2人
- ・ 実習生の振り返りより:学習者が間違いを恐れずに話せる雰囲気づくりと、寄り添う姿勢が支援者にとって重要だと学んだ。今後は学習者の「話したい」という気持ちを引き出す関わりを意識したい。

《かすがいふれあい教室(実習生:北村 しをり)》

<h3>教室の基礎情報</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・ 開催場所:レディヤンかすがい、高蔵寺ふれあいセンター ・ 開催日時:36回/年 レディヤンかすがい金曜日クラス 10:00~11:45 レディヤンかすがい日曜日クラス 10:00~11:45 高蔵寺ふれあいセンター日曜日クラス 13:30~15:15 ・ 主催者:春日井市 → 春日井国際交流会(KIF)に委託 ・ 対象者:15歳以上の春日井市に住んでいる人、春日井市に通勤・通学している人 ・ 参加費(学習者):教科書代(2,640円(税込)) ・ 目的:「生活者としての外国人」の日本語学習機会の確保を図る 	<h3>訪問調査から (レディヤンかすがい金曜日クラス)</h3> <ul style="list-style-type: none"> ○参加して感じたこと <ul style="list-style-type: none"> ・ 支援者と学習者が活発にコミュニケーションをとっており、雑談の内容を授業につなげていくことも <ul style="list-style-type: none"> →和やかな雰囲気の話やすさ、質問しやすさにつながる ・ 複数の支援者の方々の授業を見学し、多様な教え方を学ぶことができた ・ 支援者が学習者に日本語を教えるだけの場所ではない <ul style="list-style-type: none"> 学習者の母国や母語について教えてもらい、楽しく交流できた ○課題 <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習者の定着率、日によって学習者の人数やレベルが異なる <ul style="list-style-type: none"> →担当の支援者が頻繁に変わってしまうこと、前回の授業との連続性がないことに学習者は戸惑ってしまうのではない ⇨複数の支援者と話す機会にもなる
---	---

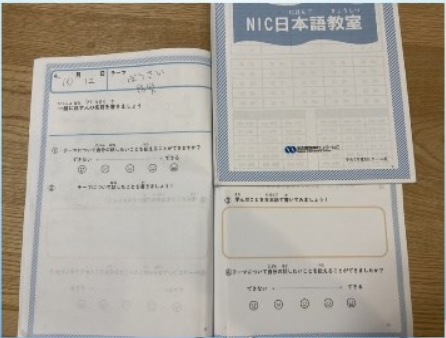
- ・ 開催地域:春日井市
- ・ 対象者:15歳以上の春日井市に住んでいる人、春日井市に通勤・通学している人
- ・ 活動目的:「生活者としての外国人」の日本語学習機会の確保を図る
- ・ 学習者の国籍:ベトナム、ネパール、中国、インドネシア、フィリピン、ニュージーランド、ブラジル、コロンビア
- ・ 活動形態:各グループ支援者1人に対して学習者1~3人
- ・ ボランティア数:7~8名
- ・ 実習生の振り返りより:複数の支援者の方々の授業を見学し、多様な教え方を学ぶことができた。また、支援者が学習者に日本語を教えるだけの場所ではなく、学習者の母国や母語について教えてもらい、楽しく交流できた。

《NIC 日本語教室(実習生:横江 隆弘)》

ある日の日本語教室①

- ・ 学習者14名 ボランティア10名
- ・ ボランティアの役割
 - リーダー 1名 全体のコーディネーター
 - その他 学習者2-3名 7グループに分けて、ボランティアを1-2名ずつ配置。
- 基本的に日本語で、テーマに沿った形で、会話の練習
- テーマの例: ①自己紹介 ②友達になりましょう ③私のふるさと ④防災 ⑤食べ物・料理など

授業で使用しているノート



- ・ 開催地域: 名古屋市中村区
- ・ 対象者: 大人
- ・ 活動目的: 外国人とともに学ぶ
- ・ 学習者の国籍: 中国、ネパール、トルコ、ケニア、フィリピン、ネパール、ウクライナ、ロシア、ペルー
- ・ 活動形態: 少人数グループ
- ・ ボランティア数: 45名 (必要に応じて募集)
- ・ 実習生の振り返りより: 様々な国の、違ったレベルの日本語能力を持つ学習者と交流することができ、日本語教育の経験値をあげることができた。想定していた以上に、学習者の国の文化に触れることができた。

《オープンにほんご(実習生:里見 和奏)》

教室の基本情報

- ・ 開催場所: リニモテラス公益施設
- ・ 開催日時: 水・金 10:00~11:30
- ・ 主催: 長久手市国際交流協会
- ・ 国際交流協会への参加費: 1000円 (ボランティア&学習者の年会費)
- ・ 活動形式: 少人数、リクエスト対応の会話練習、学習者の希望にマッチング可能であれば随時開催


教室の特徴①

- ・ 学習者・ボランティアともに主婦の方が多い
- ・ 学習者が「話したい」と思っていることを話題に
- ・ 学習者からの相談にも対応 (例) ゴミ捨て、就活 など
- ・ 教室で告知→協会の他事業について知る機会となっている





- ・ 開催地域: 長久手市
- ・ 対象者: 会話の練習をしたい学習者
- ・ 活動目的: 様々な相談にのる、個々の学習者の要望に対応する
- ・ 学習者の国籍: 中国語圏、フィリピン、オーストラリア
- ・ 活動形態: 少人数、会話形式
- ・ ボランティア数: 10名
- ・ 実習生の振り返りより: メモを取ったり、わかる言葉で伝えようとしてくれたりする懸命な姿に励まされ、楽しく活動することが出来た。

《にほんごで、はなそう!ながくてクラス(実習生:永瀧 琴子)》

<p>長久手市</p> 	<p>人口：約6万1千人（2024年4月）</p> <p>外国人住民数：1194人（2024年4月） 住民の約2%</p> <p>1位 中国 272人（22.8%） 2位 韓国・朝鮮 177人（14.8%） 3位 ベトナム 154人（12.9%）</p> <p>日本語教室...長久手市国際交流協会が開催 ウェルカムにほんご教室 にほんごで、はなそう!ながくてクラス こども にほんご オープンにほんご</p>	<p>学習者について</p> <p>学習者：19名 出身国：中国11名、タイ3名、ベトナム2名、インド1名、 オーストラリア1名、アメリカ1名</p> <p>参加者の目的</p> <p>①会話の練習 ②資格勉強（日本語能力試験など） ③1から日本語の勉強をしたい</p> <p>言語レベル：人それぞれ 木曜日の午前に開講→主婦、フレキシブルな仕事をしている方</p>
--	---	--

- ・ 開催地域：長久手市
- ・ 対象者：会話の練習をしたい学習者
- ・ 活動目的：会話の練習、資格勉強
- ・ 学習者の国籍：中国、タイ、ベトナム、インド、オーストラリア、アメリカ
- ・ 活動形態：マンツーマン、少人数グループ
- ・ ボランティア数：17名
- ・ 実習生の振り返りより：にぎやかな雰囲気、活発に会話が弾んでいることが特徴で、楽しく参加することができた。また、ボランティアが学習者に教えるだけではなく、学習者からもたくさん学ぶことがあった。

《DiVE CAFÉ にほんごクラブ(実習生:西坂 茉那)》

<p>● 教室の歩み</p>  <p>設立 大人と子供を対象</p> <p>授業開始 教材をこちらで用意 授業開始前にゲームを行う 個別支援</p> <p>授業変更 各自で教材を用意 ゲームを廃止</p> <p>現在</p>	<p>● 感想・課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生が多いことから、進路について悩む子が多くいた →その子の最適な進路は何なのか常に考える必要があり、難しく感じた ・学習者と支援者の人数が毎回変わり、その時々で教室に課題が生じる ・勉強をする場であり、居場所になる場でもあるが、学習者同士が勉強よりもお話の方が長くなってしまうことがあること →どちらが正解とはないが、支援者の共通認識は必要だと思った 
---	---

- ・ 開催地域：名古屋市中村区
- ・ 対象者：小学生～中学生
- ・ 活動目的：日本語学習、学習支援
- ・ 学習者の国籍：中国、ネパール
- ・ 活動形態：マンツーマン
- ・ ボランティア数：5名
- ・ 実習生の振り返りより：中学生が多いことから、進路について悩む子が多くいたため、その子の最適な進路は何なのか常に考える必要があり、難しく感じた。

⑤ 地域日本語教室調査の感想(担当者より)

地域日本語教室への参加は、これまで授業で学んできた知識や考え方を、実際にアウトプットする貴重な機会となった。教室でのボランティアを体験することでその意義を実感するとともに、親戚や友人ではないボランティアという立場で学習者に関わるからこそ生まれる距離感や関係性に、多くの気づきや学びを得ることができた。(中島 莉子)

地域日本語教室にボランティアとして参加したことで、学習者の日本語学習の様子や、ボランティアの方が工夫して日本語を教える様子などを実際に見ることができた。日本語教室は日本語を学ぶ場としての役割だけでなく、学習者の日本生活での困りごとを解決する、さらに学習者の母国についてボランティアが学ぶといった多様な役割を持っていることにも気づくことが出来た。(永渕 琴子)

2-2. 県大交換留学生の日本語クラス支援

横江 隆弘

本学では、交換留学生向けに、「日本語文章表現」「愛知を知る」「日本を知る」「総合日本語」「トピックディスカッション」「日本語実践」「聴解・会話」「日本語読解」「語彙・漢字」という日本語を習得するための授業が開講されている。実習生は、各自の興味・関心のあるクラスに参加し、実践活動を通して、日本語の教授法を体験しながら学んだ。

① 実習生が行ったこと・役割

本実習では、実習生は個別に複数回にわたり、留学生を対象とした日本語クラスに補助として参加し授業支援を行った。クラスの規模や学習者の日本語レベルは授業ごとに異なり、少人数(3~5名)の発表中心のクラスから、10名以上の比較的大人数のクラスまで多様であった。

実習生の主な役割としては、グループワーク時に各グループを回り、学習者の質問に答えたり、作文や練習問題の確認・添削を行ったりした。また、留学生が作文を読むのを聞き、内容理解の補助や語彙・漢字の読み方・書き方の支援、音読時の発音確認なども担当した。リスニングの活動では、ニュースの読み上げや物語の要点説明を行い、学習者が内容を理解しやすくなるよう補助した。

さらに、発表活動の多いクラスでは、留学生の発表を聞いて質問や感想を伝えたり、コメントシートを記入したりした。場合によっては、自身も学習者と同じ立場で発表を行い、日本人学生として日本文化や自身の経験(就職活動、大学生活、愛知県についてなど)を共有する役割も担った。会話の授業では、教員とともに見本となる会話を行ったり、話題の広げ方や自然な会話の流れを示したりした。

このように、単に質問に回答することにとどまらず、授業内容や活動の目的に応じて、留学生と教員をつなぐ役割を担うこともあった。

② 実習を通して学んだこと

実習を通して最も強く感じたのは、留学生の日本語の誤りや不自然さをどこまで、どのように指摘・修正するかの難しさである。意味は通じているが日本語として不自然な表現に対し、全てを直すのではなく、学習者のレベルや授業の目的に応じてその程度を見極める必要があることを実感した。特に語彙・漢字中心の授業では、文法の訂正をどの程度行うべきか迷う場面が多かった。

また、学習者の背景や文化を尊重する姿勢の重要性も学んだ。授業内では、学習者が自国や自身の文化について語る場面が多く設けられており、教員が「あなたの国ではどうですか」ではなく「あなたの文化ではどうですか」と問いかけていた点が印象的であった。これにより、学習者一人ひとりの多様性が尊重され、安心して発言できる雰囲気が生まれていると感じた。

さらに、教材の扱い方や授業設計についても多くの学びがあった。文学作品を扱う授業では、時代背景や作者について丁寧に説明することで、学習者の理解と興味を深めていた。また、

「学んだ日本語を将来どのように使うのか」という目的を明確にした授業が構成されており、日本語教育が単なる言語習得にとどまらないことを実感した。

一方で、学習者の日本語レベルの差への対応や、発言が得意な学生と苦手な学生にどのように対応するか、質問をしてこない留学生にどこまでこちらから関わってよいのかなど、多くの課題が明らかになった。しかし、それらは簡単には解決することができず、「もやもや」が残った。

③ 今後どのようにいかしていくか

今回のクラス支援の実習で得た学びを、今後日本語教師を目指す上で大切にしていきたい。まず、誤りの訂正については、「何を直すか」だけでなく「なぜ今それを直すのか」を常に意識し、学習者の負担にならない支援を心がけていきたい。また、発音やイントネーション、アクセントの指摘についても、さまざまな工夫を取り入れ、学習者が理解しやすい方法を模索していきたい。

さらに、学習者一人ひとりの背景や目的を尊重しつつ、安心して発言できる学習環境づくりをしていきたい。グループワークの編成や活動の進め方についても、固定化のメリット・デメリットを文献などから学び、状況に応じた柔軟な運営ができるようになりたいと考える。

また、日本文化を説明する際には、学習者に誤解を与えないよう、自身の立場や個人的な見解であることを明確にし、慎重に言葉を選ぶ必要があると感じた。今後は、日本社会や文化についての知識もより深め、根拠を持って説明できるよう努力していきたい。

2-3. 日本語ボランティアシンポジウム 2025

小中 桃恵・北村 しをり

概要

テーマ:日本語教室のいろいろなカタチ

開催日:2025年12月6日(土)

開催場所:名古屋国際センター 別棟ホール

参加者:日本語学習支援に携わっている方、関心のある方

「集まる場所」としての日本語教室に着目し、基調講演及びパネルトークを通して、地域日本語教室の新しい活動のあり方について考えることができた。

基調講演「『集まる場所』としての日本語教室～地域コミュニティの視点から～」

講師:河村則行(名古屋大学大学院環境学研究科准教授)

名古屋大学大学院にて社会環境学を研究しておられる河村則行氏による基調講演では、日本語教室を単なる語学学習の場ではなく、「集まる場所」として捉えることの重要性を学んだ。日本語教室は、外国人住民が安心して過ごせる場であるだけでなく、参加者が抱える問題に気づき、行政や福祉へつなぐ役割も担っている。このように、支援が語学指導にとどまらず、生活支援へと自然に広がっていく点が印象的であった。また、支援を受けた側が支援する側へと転じ、互いに助け合う関係が生まれることや、地域イベントへの参加を通じて教室と地域がつながっていく実践例からは、日本語教室がまちづくりにも寄与する可能性を感じた。一方で、多くの日本語教室がボランティアベースであるがゆえに運営の継続性や人材確保といった課題もあり、教室だけで抱え込まず、地域全体で支え合う仕組みづくりが必要だという点を再認識した。講演の中で語られたことには今後日本語教育に関わるうえで生かせるヒントがあり、大変有意義な学びとなった。

パネルトーク「地域コミュニティと日本語教室～新しい活動のあり方をめざして～」

河村則行氏をコーディネーターとして、パネリストに名古屋市守山図書館司書岡崎恵理氏、ヒューマンアカデミー日本語学校名古屋校教務主任峠和宏氏、明治安田生命名古屋本部ボランティアリーダー長島吉郎氏、日本語教室「たのしくつながる日本語教室」ボランティア矢島清香氏を迎えて、パネルトークが開催された。異なる所属の登壇者の皆さんから実際の



パネルトーク「地域コミュニティと日本語教室

～新しい活動のあり方をめざして～」の様子

取り組みや直面している課題についてのお話を伺い、それぞれの立場の強みを生かした支援のあり方を模索していること、またどの立場にも固有の課題があることが理解できた。

教室交流会

東海地域で活動されている日本語教室やボランティアグループの方々、またそれらの活動に関心を持っているの方々の中に、「愛知県立大学日本語教員課程『日本語教育実習』』としてブースに参加した。ブースではこれまでに実習で取り組んできたことや学んだことをまとめたポスターや過去の日本語教育実習報告書を掲示し、愛知県立大学の日本語教育実習について紹介した。ポスターは、実習生で作業を分担し、昨年度のポスターも参考に内容や形式を考えて作成した。当日は多くの方がブースに足を運んでくださり、愛知県立大学の日本語教育課程について知っていただく機会にもなった。また、日本語教員課程のカリキュラムや実習の内容への質問等もいただいた。他の地域日本語教室等のブースを見学し、お話を伺うこともでき、様々な教室の活動を知ることができた。



愛知県立大学日本語教員課程「日本語教育実習」のブース

所感

今回のシンポジウムを通じて、日本語教室が人々の集まる場として果たしている役割について理解を深めることができた。講演会では、日本語教室が単なる学習の場ではなく、地域の交流やコミュニティ形成の場として機能しているというお話が印象的だった。さらに、パネルトークでは様々な立場の人々がそれぞれの立場の強みを生かして日本語教育に関わっていることを知り、その多様性に驚いた。また、シンポジウム参加者が登壇者に積極的に質問をしている様子からは、日本語教育に携わる方々の熱意や問題意識の高さを強く感じた。

一方で、教室交流会では、もう少し話しかけやすい雰囲気を作る工夫が必要であったと感じた。また、自分自身ももっと積極的に話しかける姿勢を持つべきだったと反省している。他のブースでは活発な意見交換が行われていたため、そのような雰囲気作りを参考にしたいと思った。

2-4. 外部講演会参加

橋本 佳澄

今年度は、東海日本語ネットワーク(TNN)などが定期的に主催する、地域日本語教室や多文化共生などに関する講演会の中から各自が2つを選んで参加した。以下では、それらの参加報告とそこで得られた学びについてまとめる。なお、本内容は、各自が講演会参加後に記録した報告書をもとに、一部編集・引用したものである。

『実践!大垣市のプレスクール 13年、これまでの取り組みー「つながる」学習と支援をめざして』

日時:2025年4月12日(土) 13:30~15:00

場所:名古屋国際センター5階 第1会議室

講師:大垣市プレスクール「きらきら教室」日本語指導員 坪井牧子氏

◆ 講演の要点

(1) 大垣市のプレスクールに関して

プレスクールとは、小学校入学前の外国人の子どもを対象に、初期段階の日本語指導および学校生活への適応支援を行う取り組みである。大垣市では、就園児とその保護者を対象に、9月から翌年2月末までの約半年間、指導が行われている。保育課や教育委員会と連携しながら、指導記録や追跡調査を通じた情報共有を行うほか、ガイドブックや多言語の映像資料の作成にも取り組んでいる。

指導形態は大きく分けて二つある。一つは巡回指導で、主に個別指導として実施されている。事前に行う語彙調査を基に、子どもの日本語レベルに応じた指導が行われており、実施回数には個人差があるものの、現在はおおよそ2週間に1~2回程度行われている。もう一つは集団指導で、親子で参加する形式となっており、半年間で5回程度実施される。集団指導では、子どもへの日本語指導に加え、保護者向けの日本語練習や学校生活に関する情報提供も行われている。

(2) 大垣市のプレスクールのメリット

- ・ 市役所と連携することで、資料が改善され「やさしい日本語」の資料が増えた
- ・ より細かな語彙調査が導入された
- ・ 支援内容が可視化、共有化されており、利用しやすくなった

(3) グループディスカッション

① 子どもたちに就学前に身につけておいてほしい力、② 保護者に就学前に知っておいてほしいこと、の2点について話し合った。

子どもに関しては、ひらがなの読みや書き順をあらかじめ知っておいてほしいという意見がある一方で、言葉が十分にわからなくても、周囲の様子を見て行動する力や、集団の中での協調性を身につけておくことが重要であるという意見が挙げられた。また、保護者に対しては、自国とは異なる日本の学校や社会のルールを理解してほしいという意見が出た。具体的には、日本で

は宿題を見てあげることや、学校での出来事について子どもの話を聞くことなど、親子で過ごす時間や関わりが重視されている点を知っておいてほしいという意見が共有された。

◆ 学んだこと

今回の研修会では、就学前という新しい視点から日本語教育の現状を学ぶことができた。最も印象的だったのは、保護者や学校の先生に理解を促すことの大切さである。異なるバックグラウンドを持った保護者の方々は、教育の制度や申し込みの仕方、持ち物の名前の書き方まで細かく説明しないとわからないことが多い。そのことを学校側が知っておく必要があり、そのために日本語教室と学校が情報共有しなければならないと学んだ。さらに、就学前の生徒に求められることは言語的な能力よりも、学習に取り組むための姿勢であると考えた。授業に集中して取り組む、友達と協力し合える、こうした学校生活への準備が重要である。日本語教育を通じて、語学レベルを知り、非認知能力を高め、成功体験を重ねることが必要だ。最後に、私たちのグループでは、就学前の母語教育についての意見が出た。母語と日本語を同時に学習することでどちらも中途半端になってしまうのではないかと、論理的思考を説明する術を失ってしまうことにつながるため、言語以外の勉強に影響してしまう可能性があるという意見が出た。母語教育に関しての現状はまだ知らないことが多いため、これから調べて理解を深めていきたいと感じた。

『外国人相談窓口、昨今の状況』

日時：2025年5月10日(土) 13:30~15:00

場所：名古屋国際センター3階 第2会議室

講師：公益財団法人愛知県国際交流協会 あいち多文化共生センター 多文化ソーシャルワーカー 荒井彰子氏

◆ 講演の要点

(1) 多文化ソーシャルワーカーによる相談内容の例

- ・ 令和6年度は約3,000件の多言語相談が寄せられ、日本語による相談は約1,900件
- ・ 生活に関する相談が多い
- ・ 内容は多岐にわたるが、離婚の手続きに関する相談が多く、弁護士にも依頼がいく
- ・ ロマンズ詐欺などのSNSトラブルも近年増加している

(2) 多文化ソーシャルワーカーの役割

- ・ 関係者は多岐に渡り、相談ごとに関係者が異なるため、関係機関を「繋ぐ」役割を担う
- ・ あくまで支援者であるため、相談者である本人が行うことが可能であれば手続きなどは任せる
- ・ 相談者本人の考えや意思を尊重しサポートを行う
- ・ 相談者、関係機関、多文化ソーシャルワーカーの3者同時通話も可能

(3) 相談や支援をする人材の現状

- ・ 有期雇用者が多く経験が蓄積されにくいこと、バーンアウトも多いことから、人材育成に課題がある

- ・ 出入国在留管理庁が外国人支援コーディネーターを養成している

(4) 相談・支援の基本

- ・ 根本的な問題の把握のため、相談者の気持ちに寄り添いながら問題を整理
- ・ 外国の文化や価値観の違いや制度の違いについて認識する必要がある
- ・ 相談者の意思を尊重し、自分の考えを押し付けない
- ・ 相談者と支援者は対等な関係である
- ・ 日本語教師の方からの事例の共有

◆ 学んだこと

技能実習や特定技能で日本に滞在している方々はそれぞれの機関にも相談窓口はあるが、多文化ソーシャルワーカーという存在がいることで、ビザの相談ではなく生活に関する相談など第二の相談窓口のような感覚で使ってもらえているのではないかと考えた。相談をしてくれてもなかなか問題解決できることは少なく、問題を軽減させることが限界であることが多いと知り、マニュアルのない多様な相談の難しさを感じた。講演の最後で日本語教師の方から事例の共有があったが、ビザの問題や子どもの学校入学に関する相談などかなりパーソナルな相談も受けていることを理解した。日本語教師は外国人にとって身近で相談しやすい日本人の1人であるということがわかった。

2025年度春季大会一般公開プログラム

『若者のキャリア形成支援としての日本語教育-自律性・主体的自己決定を支える-』

日時:2025年5月24日(土)10:00~12:00

場所:オンライン

登壇者:慶應義塾大学教職課程センター教授 鹿毛雅治氏

友国際文化学院校長 金子史朗氏

武蔵野大学グローバル学部日本語コミュニケーション学科教授 志賀玲子氏

◆ 講演の要点

日本語教育はどのように若者のキャリア形成をサポート・後押しできるのか。

(1) 金子史朗氏(日本語学校での実践)

- ・ 親の希望や世間の評判に影響を受けて将来像や自身の考えがボンヤリとしている学生、大学合格後の目標を失ってしまう学生→キャリア授業の重要性(自己理解、探究)
- ・ 日本語力が高いことと自律度が高いことはイコールではない
- ・ キャリア授業の成否の鍵は教員にある(ファシリテーションスキル、コーチングスキルなど)

(2) 志賀玲子氏(海外ルーツの大学生の事例)

- ・ 海外ルーツの大学生の来日時期、滞日年数、日本語習熟度は様々であるが、周囲の人々は「やさしい」、「助けてくれる」と感じている学生は多い
- ・ 置かれている状況に満足しない学生(日本社会の中で自分の強みを発揮できる場を見つけたい)⇔状況に甘んじる学生(日本社会と自分とのつながりを積極的には求めない)

- ・ 社会における自分の位置づけを認識し(自らの客観視)、現状からの脱却をはかる (人生の切り拓き) ことが、自律性・主体的自己決定

(3) 鹿毛雅治氏(教育心理学の視点)

- ・ やりたい(学びへの欲求)、やるべき(学ぶ価値)、やれそう(できる自信)がモチベーションにつながる
- ・ 自己概念・自尊心・アイデンティティの形成
- ・ 授業(学びの楽しさ、学びへの欲求)とキャリア教育(自己形成、学ぶ価値)との関連の中で、モチベーションや自信が生まれる
- ・ 「教師の居方」が重要
→ 学生一人ひとりとの対話により、それぞれの学び・自己形成への意欲をサポート

(4) 日本語教師の関わり方

- ・ 日本語を学ぶ楽しさを伝えることが、日本語学校卒業後の主体的な学びへとつながる
- ・ 学習者一人ひとりとの対話を積み重ね、共にクラスをつくるという意識
- ・ 場合に応じて他機関との連携も必要

◆ 学んだこと

今回の講演やディスカッションを通して、日本語教育が「言葉を教える」以上の大きな役割を担っていることを改めて感じた。特に心に残ったのは、「キャリア形成とは、自分の生き方を自ら描き、学びと実践を通して成長し続けるプロセス」という言葉である。これは、まさに若者が不安定で見通しにくい時代を生き抜くために必要な力であり、日本語教育がそのサポートになるという視点に強く共感した。また、学生が「自分のことを表現してみよう」、「自分の背景って何だろう」と自分自身を見つめ直すきっかけになる場をつくることや、その小さな気づきや感情に教師が丁寧に耳を傾けることが、キャリア形成の第一歩につながるのではないかと思った。私自身、進学や就職の場面で「親の期待」や「周囲の評価」、「自分の本音」の間で悩んだ経験があるからこそ、一人ひとりが自分の価値観に正直に、納得して選んでいけるようなサポートが必要だと感じた。さらに、「日本語の上達＝自律」ではないことから、日本語の能力に関わらず、「その人自身」を丁寧にみるというまなざしが教師には求められるのだと感じた。

『大学生が地域日本語教室に参加する意味』

日時:2025年7月12日(土) 13:30~15:00

場所:名古屋国際センター 3階

登壇者:2024年度愛知県立大学日本語教員課程 履修生

◆ 講演の要点

(1) 愛知県立大学日本語教員課程の概要

(2) 2024年度日本語教育実習履修者の地域日本語教室に関する発表

① 土岐市日本語教室/伊藤さん

海外に住む親戚から「日本語教師」という仕事を紹介されたことをきっかけにこの授業

を履修。見学したのは、土岐市役所市民活動課が主催する日本語教室で、毎週土曜日に開催されている。教室では、活動の最後に「振り返りの時間」が設けられ、支援者は 45 分ごとに学習者を交代する。初級者から流暢に話せる人まで、学習者のレベルは幅広い。

最初は、どのような準備をして教室に臨めばよいか分からず、戸惑う場面も多かったが、現場での経験を通して学びを得ることができ、毎週違う学習者と関わる中で、多様な支援の方法や対応の仕方を身につけられたという。教室には実際に日本語教師として働く人もいて、授業方法を教えてもらえる機会もあった。市役所が紹介して来る学習者もいるなど、制度としての支援体制も知ることができた。現場を直接見ることで、日本語教育の意義や現実を深く理解でき、将来も日本語教育に関わっていきたいという気持ちが強まった。

② つしまにほんご教室/澤田さん

外国語学部に所属しており、外国の人と関わりたいという思いから履修。見学した教室では、参加者が都度払いで通っており、マンツーマンまたは 2 対 1 での学習が中心。高校生も参加しており、学習者のレベルも様々であった。

この教室は津島市から依頼を受けたボランティアによって運営されており、教える側は必ずしも日本語教育の専門家とは限らない。少人数の教室だからこそ個々のニーズに応える柔軟さと、ボランティアの人員や知識の不足による難しさを感じたという。支援者と学習者が対等な関係にあることが印象的で、学び合う関係が築かれていた。今後は、多文化共生の視点を大切にしていきたいと感じた。

③ こどもにほんご/村林さん

外国人児童のニュースを見たことをきっかけに、自身の引っ越し経験と重ね合わせて共感を覚えた。言語や文化の変化が子どもにとってどれだけ大変かを感じ、子どもの教育にも興味があったことから、大学 2 年生から支援活動に参加。

見学した教室では、教材の指定がなく自由度が高い。学習支援だけでなく、保護者同士が情報を交換する「ママ友」コミュニティもある。また、学校の宿題や手続きのサポートも行っており、単なる学習の場ではなく、生活全般の支援にもつながっていた。中には、家庭の事情などで日本語学習に集中できない子どももおり、多様な背景に配慮した支援が必要だと実感した。将来は自治体職員として、日本語教育の分野に関わっていきたいという思いを持っている。

④ こぎつね教室/米山さん

自宅の近くにある工業団地に外国人住民が増えたことをきっかけに日本語教室に関心を持った。見学した教室は、特に不就学の子どもに注目した教室。日本語教師の資格を持つ先生が 4 人おり、大学生ボランティアは 2 人ほど。学習者によって通う時間や頻度は異なる。

対象は、学校に通っていない子どもや在学中の子どもの両方で、小学生は送迎が必要だが、中学生は自力で通っている。卒業の基準は明確ではないが、到達度テストや、漢字や算数の理解度によって判断されている。市が初期指導の受付や指導計画を立てる役割を担い、他の地域の教室につなぐ「入口」としての役割もある。家庭で日本語を使わない子どもも多く、日本語の会話力に差があるのが実情。ある生徒の卒業時には保護者が感

謝を伝える場面もあり、支援が保護者の安心感にもつながっていると感じた。将来は教職に就き、外国ルーツを持つ子どもたちを支えていきたいという目標を持っている。

(3) ディスカッション

- 大学生を受け入れる時に困ること
 - 連絡なしの欠席や突然来なくなる
 - 単位のために来ていてやる気があまりない学生もいる
 - 英語学習のためなど、目的が異なる学生がいること
- 大学生を受け入れる時、期待すること、嬉しいこと
 - 自ら準備をして、積極的に参加してくれる学生もいる
 - 教室の雰囲気明るくなる
 - 学習者と年齢が近く、学習者が嬉しそう
 - 同じテーマでも学生ならではの視点を知ることができること
 - 新たな勉強法などを導入してくれると嬉しい (ICT とか)
 - 社会人になっても継続してほしい
- 大学生が行きやすいと感じる日本語教室
 - 夜の時間帯に開催しているところ
 - 学生ボランティアに対してオープンにしているところ
 - 駅に近いところ
 - 連絡のレスポンスが速いところ
 - ボランティア参加の拘束が厳しくないところ

◆ 学んだこと

今回の見学と講演会を通して、日本語教室は単なる「学びの場」ではなく、人と人がつながり、地域で支え合う場所だと気づかされた。

ボランティアというと「参加するのなら毎週きちんと参加しなければならない」というイメージがあったが、「半年に一度でも来てくれることが大切」という言葉に驚いた。大きなことをしようと気負わず、自分にできる範囲で、関心を持って関わるからこそが大切なのだと感じた。そして、これがより多くの大学生に広まれば、より参加する大学生が増えるのではないかと考えた。

『外国人のための日本語で学ぶライフプラン—健康で安心して暮らすために—』

日時:2025年10月11日(土) 13:30-15:00

場所:名古屋国際センター4階 第3研修室

講師:西日本短期大学 別科日本語研修課程 高向有理氏

◆ 講演内容の要点

(1) ライフプランテキスト出版に至る経緯

① 留学生向けの性教育教材開発

- 孤立出産の末の死産、時期を過ぎた中絶や日本では認められていない薬を使用した中絶

が罪に問われてしまう現状

- ・ 在留資格の種類により、就学・就労の継続が難しくなる
- ・ 出身国と日本とではリプロダクティブ・ヘルス・サービスや制度が異なっている
→来日前後のできるだけ早い時期に知っておくことで、リスクを回避できる

② 性教育からライフプランへ

- ・ 性教育は、誰とどのように生きるかを考えること
- ・ 在留資格や労働関連法、暴力から身を守る方法、リプロダクティブ・ヘルスについて包括的に学ぶ必要性
- ・ 自身が持つ権利を知り、それを行使するスキルを習得する必要性
→日本で外国人が安心して暮らすための頼りになる一冊を作りたい

○なぜ妊娠が「こまりごと」になってしまうのか

- ・ 日本では、セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ (SRHR) (性と生殖の健康と権利) の概念が浸透していない
→妊娠を理由に職を失うことや、帰国を迫られるマタニティ・ハラスメント
- ・ 避妊方法の選択肢が少ない、避妊・中絶サービスへアクセスしにくい、避妊薬・中絶薬が高額
- ・ 家族帯同が認められていない在留資格では子どもと一緒に暮らせない

(2) 書籍内容の紹介

人権ベースで実用的な内容

- ・ 身近な教師や支援者と学ぶことで相談できる環境を作る
- ・ 日本で安心して暮らすために必要な知識と利用できる制度を調べる手段を身に着ける
➢ 困ったときに見る自分用のノートを書き込みながら作っていく
- ・ 学んだ人が同胞コミュニティに発信、共有することを期待
- ・ 先生も一緒に調べて勉強していく本

各章のポイントと構成

- 1章 ライフプラン
- 2章 人権 (ハラスメントなど)
- 3章 日本で仕事をする (在留資格、法律など)
- 4章 日本で家族をつくる
- 5章 こまったときの相談と行動

(3) 使用するときの留意する点

学習者の文化的背景や宗教的価値観に十分配慮することが大切。性や家族に関する考え方は国や地域によって大きく異なるため、相手を尊重した形で授業を進める必要がある。

(4) 相談されたとき、その後

相談したいと思ってもらえる人とは・・・

- ・ 一方的な価値観を押し付けない
- ・ 受援力がある
- ・ 説明を口頭、書面と二重化して行う

- ・ 連携先を常備しておく
- ・ 相談者の意思を尊重する

学校や職場などの「縦のつながり」や、同胞コミュニティ・宗教団体などの「横のつながり」では、かえって相談しにくい場合がある。そのため、地域の日本語教室など「ちょうどいい距離感の斜めのつながり」が、支援の場として重要な役割を果たす。

◆ 学んだこと

来日前後に「妊娠したら帰国しなければいけない」と警告を受けたという外国人が多いこと、そのため予定外の妊娠をした際に相談できず状況が悪化してしまうという悪循環が起きていることを知り驚いた。また、私自身セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ (SRHR) の概念を知らなかったことから、日本の性教育や性に関する権利の周知が遅れていることが伺えた。留学生や技能実習生が母国では使用できた避妊方法・中絶方法が日本では認められていないことで戸惑うケースも多いということだったので、来日前後に日本の制度や妊娠した場合の選択肢を知っておくことの重要性を感じた。

また、相談を受けたときに留意するポイントや相談したいと思ってもらえる姿勢に関して学び、「選択肢を提示し、一緒に考える」、「相談者の意見を尊重する」ことが重要なのだと再認識した。紹介された書籍は学習者の自己決定を支え、学習者が自分で調べる手段を身につけることを目標としており、情報へのアクセス方法や相談窓口について知ることができる。相談を受けた場合も同様に、相談者と一緒に調べながら選択肢を提示し一緒に考え、最終的には相談者の意思を尊重するという一連の流れを通して、次に同じことに困った際に学習者が自分で解決する方法を身につけることができるような支援の方法を意識するべきだと感じた。

外部講演会への参加を通し、さまざまな立場から日本語教育に関わる方々のお話を聞くことで、日本語教育を多角的に捉える視点を得ることができた。さらに、現場における課題や問いについて、自分自身で考えを深める貴重な機会となった。

2-5. Facebook

里見 和奏

本校日本語教育実習の Facebook では、授業の様子や実習生が感じたことを写真と共に掲載している。本稿では一部抜粋をして紹介する。掲載していない実習生たちのコメントや写真、国外実習の様子も見るができるため、ぜひご覧いただきたい。



◆2025年4月16日

はじめに、先生方より、実習全体に関する具体的なガイダンスがありました。その後、他己紹介の形式で、実習生がそれぞれ他の実習生のプロフィールについてプレゼンテーションを行いました。発表を聞く中で、多くの実習生が半年～1年程度の長期留学経験を持っていることを知りました。多くの学生が海外で言語を学んだ経験があるということから、日本でその言語を学ぶのと現地で学ぶのとではどのような違いがあったのか、そして、それぞれの国における外語教育の方法の違いにも興味が湧きました。また、愛知県立大学で行われている留学生向けの日本語クラスについても説明がありました。実習生も参加ができるので、これからさまざまな日本語教室に参加してみたいです。実践的な知識が得られることにワクワクしています。(実習生 O)



◆2025年4月23日

4月23日は、あいち地域日本語教育推進センター総括コーディネーターの村田竜樹さんから「愛知県における地域日本語教育の取組について」お話を伺いました。はじめに、愛知県の外国人住民の状況を学びました。県内の外国人の割合は増加し、全国で3位、今後も増加が見込まれます。特に、アジア圏出身者が大きく増加していますが、ブラジル国籍等の方々も依然として多く、永住化傾向が進んできています。次に、税金を使うことに批判がある中で、なぜ行政が地域日本語教育を行うのかグループディスカッションを行いました。「日本の社会に貢献する人を育てるため」、「全ての人に必要最低限の生活を保障するため」、「教育を受けさせる義務、権利のため」、「行政は地域に大きな影響力を持つため」等の意見がありました。最後に、愛知県の主な取り組みを具体的に学びました。愛知県は2019年に日本語教育の推進に関する法律が制定される前から日本語教育の活動があり、早い段階から動きがあったことがわかります。また、現在では2分の1のお金を国が補助している為、活動が保たれている団体が多くあります。多文化共生社会を実現する目的として初期日本語教育の基礎を作り上げていました。上記の授業内容から愛知県の日本語教育の歴史や実態を知るとともに、なぜ日本語教育が必要かという基本的なことに立ち返ることができました。歴史や今後の動きを踏まえた上で、日本語教育をする目的をしっかりと捉え、多くを学ぶことによって柔軟に対応していくことが大切だと学びました。(実習生 N)



◆2025年5月7日

今回の授業では、「いわくらにほんごクラス」の運営に携わっているの方々から、現場での取り組みや想いについて直接お話を伺いました。いわくらにほんごクラスは、岩倉市の委託事業として、地域の外国ルーツの方々安心して生活できるようになるために日本語力を身につける場です。そのために、教科書を使った講義型ではなく、実際の場面を想定したような、日常会話のキャッチボールを大切にされた対話型の学びが中心で、初級レベルの方を主に対象としています。今回のお話で特に印象に残ったことは、この教室が大切にしている「対等な関係」という考え方です。日本語サポーターと学習者は、教える人・教わる人という一方向の関係ではなく、「互いに伝え合い、学び合う関係」であることを大切にしています。例えば、アイスブレイクで各国のあい

さつを紹介し合う時間があり、互いの国の文化や言語を尊重し合い、学び合う姿勢が形になっているのだそうです。さらに、印象的だったのは、クラスが言葉を学ぶ場だけでなく、安心できる居場所になっているという点です。世代や国籍を超えていろんな出会いと繋がりが生まれることが魅力の一つであると知りました。また、この教室の活動が委託事業であるということにも、大きな意味があります。「ボランティアは正義」という空気感に頼らず、行政の課題解決を市民団体が担うという形で、予算面や発信面でも支援を受けながら、持続可能な仕組みで活動が行われているというお話も、とてもリアルで学びが多いものでした。「教室をつくる」ことが、「みんなの居場所をつくること」や「地域の多文化共生を実現する」ことにつながるという思いを根底に持ち続け、いわくらにほんごクラスの役員の方々や市の方々が試行錯誤を重ね、活動を広げてきたことが分かりました。(実習生 H)



◆2025年5月17日

今回の授業では、愛知県国際交流協会(AIA)を見学し、職員の方からお話を伺うとともに、多文化共生センターを見学しました。AIAは、市町村や国際交流関係機関・団体と連携し、国際交流の推進に向けてさまざまな取り組みを行っています。特に印象的だったのは、地域に暮らす外国人を対象とした日本語教育や生活支援の充実ぶりでした。多文化共生センターには、日常生活に関する相談ができる窓口や日本語教室、交流ひろば、図書コーナーなどがあり、誰でも利用しやすいような工夫がされていました。相談窓口では、在留資格や労働に関すること、日常生活の困りごとといった幅広い内容や多様な言語に対応しており、外国の方々が抱える不安に寄り添う仕組みが整えられていることが分かりました。また、相談窓口の多文化ソーシャルワーカーの方からは、「誠実さ」、「公平さ」、「先入観を持たないこと」を大切にし、支援する側が優位にならないように接する姿勢が必要だというお話を伺い、心に残りました。支援は一方的なものではなく、対等な関係の中で信頼を築くことが大切だということを改めて考えさせられました。さらに、日本語教室の授業も見学しました。私が見たグループの学習者には、留学生や旅行者、コンビニの店長をしている方など、さまざまな立場の方がいて、一緒に学習していました。学習者の方々は積極的に発言しながら楽しそうに取り組んでおり、先生の方も「いろいろな地域の

人と交流でき、新しい発見があるのが楽しい」と話していました。日本語教室が、日本人と外国人の相互学習の場になっていることが分かりました。また、外国人への支援にとどまらず、日本人に向けた取り組みも行われていることが印象的でした。たとえば、日本語指導員のスキルアップ研修や多文化共生コーディネーターの育成講座など、将来を見据えた人材育成にも力を入れているそうです。こうした取り組みが、地域社会全体の多文化理解や多文化共生の土壌を育てているのだと感じました。今回の見学を通して、多文化共生はただの理想やスローガンではなく、関わる人々の熱意と工夫によって現場では一つひとつ丁寧に仕組みとして築かれていることを知りました。(実習生 K)



◆2025年5月21日

今回の授業では、NPO 法人トルシーダの伊東浄江氏から、民間団体による地域日本語教育の取り組みについてお話を伺いました。トルシーダは、豊田市を中心に「保見団地」などで多様な日本語教室や地域づくり活動を展開しています。活動のきっかけは、日曜日に開かれていた日本語教室で「子どもクラスを作ろう」という声が上がったことでした。その後、学校に通っていない子ども、保護者、通訳、地域の人々など、多くの関係者を巻き込みながら、教室の形や支援の内容が広がっていったそうです。また、団地内の高齢化に対応した「高齢外国人の就労支援」のお話からは、日本語能力や移動手段の制限といった課題がある中で、どのような支援ができるかを考える重要性を学びました。特に印象的だったのは、「マインドを学ぶこと」のお話です。外国人が大多数という環境の中で、学習者とボランティア、ボランティア同士が対等な関係を築きながら課題解決を目指している姿勢に感銘を受けました。こうした姿勢が、地域の課題に向き合い、必要に応じて柔軟に対応し、解決へとつなげているのだと感じました。さらに、シルバー人材センターと連携し、高齢化の課題に向き合う中で、「やさしい日本語」が一部の業界でしか認識されていない現状や、関係機関との認識の差があることも知りました。だからこそ、現場を共有し、理解を深めながら支援の輪を広げていくことの大切さを感じました。一つの機関だけでは限界があるからこそ、周囲を巻き込んだ取り組みが多文化理解につながるのだと学びました。今回の授業を通して、「民間団体による地域日本語教育」は、単なる日本語指導にとどま

らず、地域づくり、人と人との関係づくり、そして安心できる居場所づくりそのものであることを実感しました。(実習生 G)

◆2025年5月28日

今回の授業では、これまでの授業で講師の方々から伺ったお話を踏まえ、地域日本語教育の状況を振り返り、意見交換をするとともに、地域支援の学びのまとめを行いました。まず、これまで伺ったお話を振り返って、地域日本語教室において「参加者同士は対等な関係である」という考え方が共通して大切にされていることを確認しました。ボランティアと学習者、ボランティア同士は対等な関係であり、互いに学び合う関係であることが大切にされています。そして、こうした姿勢によって、地域日本語教室が日本語を学ぶ場所にとどまらず、参加者が交流を通して共に学ぶことで相互理解を深める場所、また安心できる居場所となっているのだと感じました。そして、日本語教育が抱えている課題として、日本語教師やボランティアの業務の幅や負担の大きさが挙げられました。日本語教室の参加者にとって日本語教師やボランティアは身近な相談相手となりえますが、在留資格や労働問題などプライベートかつ人生に関わる相談事に対応することに対して、負担が大きすぎる、賃金が見合っていないという意見がありました。日本語教師やボランティアの業務の幅や負担が大きいかかわらず、職業として不安定であったり、無償での活動であったりするという課題について考えるきっかけとなりました。続いて、地域日本語教室の主催団体、参加者、内容などについて整理しながら、地域支援の学びのまとめを行いました。これまで講師の方々から伺ったお話を振り返ると、一言で「地域日本語教室」と言っても、主催団体、参加者の属性、授業の内容、活動において重きを置いていることなどは様々で、教室ごとに特色があると感じました。また、地域日本語教育は入管法が改正された1990年から大きく発展してきたことを学ぶとともに、地域日本語教育の背景には、外国人に関する政策・制度やそれに伴う日本語教育推進の取り組みの歴史があることを実感しました。日本語教育が抱える課題の原因に立ち返って考えるために、日本語教育の歴史や関連する制度について理解しておくことの必要性を感じました。(実習生 K)

◆2025年6月4日

今回の授業では、前回までの地域日本語教室のまとめを踏まえて、グループディスカッションを行い、意見や感想を共有しました。その中で、日本語教師の待遇についての話題で、日本語教育能力検定と国家資格である登録日本語教師試験の違いについての理解を深めることができました。次に、8月7・8日に実施される愛知県立大学のオープンキャンパスでの「日本語教員課程コーナー」の担当を決めました。内容については、今後話し合いをして決めていきますが、興味・関心のある方はぜひお越しください。それから、私たちのメインテーマである地域日本語教室での実習に向けて、最初の準備段階として、各自が希望する日本語教室に参加できるように調整を行いました。私たちは、まだまだ知識も技能も十分ではありませんが、最長で6月から10月までの期間に、各地の日本語教室でしっかり汗(冷や汗?!)をかきながら頑張りますので、よろしくお願いいたします。「学生だけとできること」や「学生だからできること」を見つけて、少しでもお役に立てることを目標にします。(実習生 Y)

◆2025年6月28日

今回の授業では、愛知県立大学で日本語教育実習を修了された先輩をゲストにお迎えし、実習の経験や社会人として働く中で感じたことなど、貴重なお話をたくさん伺いました。日本語教室での活動内容や、海外での実習を通して得た学び、現場での戸惑いややりがいなど、実習生時代のリアルな体験を具体的に教えてください、実習を控える私たちにとって非常に参考になりました。また、実習を終えて社会人となった今だからこそ感じる、日本語教育の現場の奥深さや、大学生のうちにやっておいてよかったことなど、将来を考えるうえでも心に残るお話ばかりでした。「学生だからこそできることを、今のうちに全力でやってほしい」という言葉がとても印象的で、自分のこれからの学びや実習に向けての姿勢を改めて考えるきっかけにもなりました。普段の授業ではなかなか聞くことのできない、卒業後のリアルな声に触れることができ、実習に向けてモチベーションがさらに高まる時間となりました。(実習生 N)

◆2025年7月2日

7月2日の日本語教育実習の授業では、実習生一人ひとりが訪問調査を行った地域日本語教室について発表を行いました。教室の開催頻度や内容、学習者の属性や学習目的、さらには支援者の背景まで、非常に多様であり、「地域日本語教室」と一括りにしてもその実態は大きく異なることを改めて認識する、非常に興味深い発表会となりました。実習生の発表の中には、一定回数参加すると特典として図書カードがもらえるという教室も紹介されていました。私が調査した教室が人手不足に悩んでいたことを思い出し、このような取り組みが広がれば、支援者不足の解消にもつながるのではないかと感じました。もちろん、こうした取り組みは金銭的な余裕があってこそ可能なことではありますが、もし実施できる環境が整えば、ボランティアの方々のモチベーション向上にも寄与できるのではないかと思います。今回の授業では多くの地域日本語教室について知ることができ、今後の日本語教室のあり方を考える良いきっかけになりました。(実習生 O)

◆2025年8月7・8日

本日のオープンキャンパスでは、日本語教員課程の紹介ブースで来場者に、掲示物の内容や課程で学べること、授業の進め方などについて説明し、高校生や保護者の方とお話しました。会場は多くの方が足を止めてくださいました。ブース内では、掲示物だけでなく、学生便覧や、日本語の教科書、授業の様子をまとめた資料を手にとってじっくり見てくださる方が多くいました。来場者の中には、日本語教員という職業を初めて知った方、身近に日本語の先生がいて興味を持った方、そして将来日本語教員を目指している方など、関心のきっかけはさまざまでした。来場者と話していて印象的だったのは、副専攻として履修できる点に好意的な反応が多かったことです。学科で自分が学びたいことがすでに決まっている人もおり、その上で「日本語教員課程なら両立できるのがいい」と話してくれた方もいました。また、台湾が好きで「国外実習が台湾で行われるのがいい」と言ってくれた方もいて、自分が普段受けている授業には充実した制度があることを改めて感じました。わかりやすく説明するのが難しいと感じましたが、熱心に耳を傾けてくれる方や、質問を投げかけてくれる方が多くいました。説明する側でありながら、自分自

身も日本語教員課程の魅力や学びの幅を再確認できた一日でした。(実習生 K)

◆2025年10月29日

本日は、地域日本語教室の調査発表会をオンラインで行いました。発表会には、これまで授業でお世話になった方や、地域日本語教室の皆さまにもご参加いただき、地域日本語教室での学びを一人ずつ発表しました。授業内でも一度発表を行いましたが、今回は地域日本語教室での学びをそれぞれがさらに深めて共有することができ、発表者としてもとても有意義な時間となりました。お越しいただいた関係者の皆さま、ご協力くださった地域日本語教室の方々、本当にありがとうございました。来週からは県大の日本語クラスへの参加も始まります。地域日本語教室での経験を活かしながら、新しい学びを積み重ねていきたいです。(実習生 N)



◆2025年12月6日

東海日本語ネットワーク主催の日本語ボランティアシンポジウムに参加しました。第一部の講演からは、日本語教室を単なる語学学習の場ではなく、「集まる場所」として捉えることの重要性を学びました。日本語教室は、外国人住民が安心して過ごせる場であるだけでなく、参加者が抱える問題に気づき、行政や福祉へつなぐ役割も担っています。このように支援が語学指導にとどまらず、生活支援へと自然に広がっていく点が印象的でした。また、学習者が支援される側にとどまらず、互いに助け合う関係が生まれることや、地域イベントへの参加を通じて教室と地域がつながっていく実践例からは、日本語教室がまちづくりにも寄与する可能性を感じました。一方で、運営の継続性や人材確保といった課題もあり、教室だけで抱え込まず、地域全体で支え合う仕組みづくりが必要だという指摘には強く共感しました。第二部のパネルトークでは、登壇者の皆さんから実際の取り組みや直面している課題についてお話を伺い、それぞれの立場の強みを生かして支援のあり方を模索していること、またどの立場にも固有の課題があることを理解しました。教室交流会では、愛知県立大学日本語教員課程としてブースを出展し、活動内容やカリキュラムに関するさまざまな質問をいただきました。また、ほかの教室のブースを見学し、クラスの様子や運営の工夫についてお話を伺うこともできました。今回のシンポジウムを通して、日本語教室が持つ社会的価値の広がりや改められて実感するとともに、地域とのつながりという観点から多様な意見を聞いたことが大きな学びとなりました。(実習生 H)

◆2025年12月17日

本日は、関西大学の伊澤明香先生から、文部科学省の「ことばの力のものさし」を活用した、多文化多言語の子どものことばの力の評価についてお話を伺いました。多様な背景を持つ外国人生徒が年々増加していく中で、日本語教育の重要性はますます高まっています。一人ひとりのことばの力に合わせた支援を行うためには、年齢に伴う認知的発達を支える「ことばの力」を正しく捉えることが必要であり、そのために「ことばの発達と習得のものさし=ことばの力のものさし」があるというお話でした。「ことばの力のものさし」では、包括的なことばの発達のステージと日本語習得ステップが整理され、年齢枠ごとに「聞く・話す・読む・書く」の力について、具体的な内容が示されています。また、第一言語と第二言語を分けてレベル分けを行い、ことばの力の程度を詳細に示すことで、生徒一人ひとりの能力をよりの確に把握することができるようになります。それにより、どのような支援が必要なのか、母語や ICT をどのように活用すべきかといった点も明確になると学びました。そして、話せているからといって、日本語が十分にできているとは限らないこと、そして教師が捉える課題と生徒自身の困り感が必ずしも一致するとは限らないからこそ、このような指標を用いて、生徒のことばの力を正しく把握することの大切さを強く感じました。多文化多言語の子どもたち一人ひとりに寄り添った支援を行うために、今後の教育現場において非常に重要な視点だと思いました。(実習生 G)



◆2025年12月24日

本日の授業では、以下の内容を行いました。まず、12月6日に開催された TNN シンポジウムと「ことばの力のものさし」について振り返りをしました。シンポジウムの振り返りでは、ブース出展時の感想や講演を聞いた感想を共有しました。また、「ことばの力のものさし」の振り返りでは、日本語学習者のレベルを見極める難しさについて話し合い、その中で公平で正確な能力評価の難しさというテーマにも議論が広がりました。次に、バランスを考慮しながら、実習報告書の編集者を決定し、効率的な分担方法を検討しました。今後は、決定した分担に基づいて報告書の作成を進めていきたいと思えます。(実習生 K)

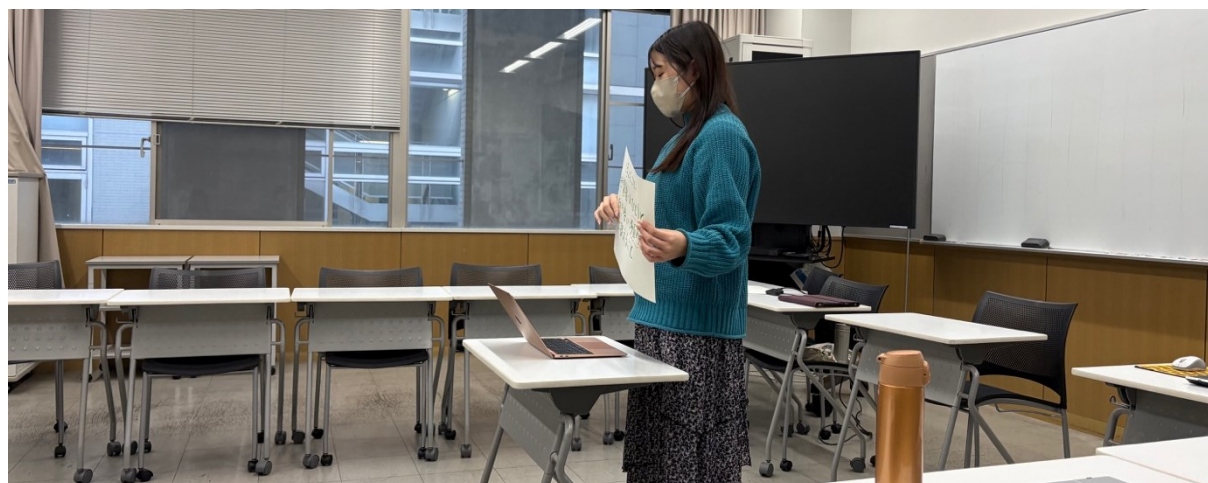


◆2026年1月14日

本日の授業では、日本語教育実習報告書の作成に向けて各自で作業を進めました。全体の構成や今後の進め方について話し合いながら作業を進めることができました。各自の担当パートと個人レポートの執筆というやるべき作業が明確になったので、2週間後の締め切りに向けてより良いものになるよう書き進めていきたいです。1年間の実習での活動やそこで学んだこと、考えたことを振り返り、報告書を作成する作業を通して、この実習での活動がとても貴重な経験であったことを改めて感じています。今後この実習報告書を読む方に、日本語教育や愛知県立大学の日本語教員課程での活動に興味を持ってもらえるような報告書にしたいです。(実習生 K)

◆2026年1月28日

本日の授業では、一年間の国内実習を通して学んだことや身につけたことを、紙にまとめて発表を行いました。実習生それぞれの発表から、日本語教育に関するだけでなく、多文化共生や相手の立場に立って考える姿勢など、日本語教育以外の場面でも大切になる考え方も同時に学んできたことを改めて実感することができました。また、実際に地域日本語教室や本学の日本語クラスに参加した経験を通して、新たな学びを得ることができたという声もありました。国内実習で得た学びを、実習生全員が今後の生活にも活かしていけるのではないかと感じています。(実習生 N)



3. 個人レポート

一年間の実習を通して得た学びや感想を、実習生 10 名が自由に記した。

日本語教育の現状と実習を通して得た学び

太田 真緒

実習を終えて

私は今まで英語や中国語など、母語である日本語以外の言語を学んできました。また、それらの語学力をさらに高めるため、留学も経験しました。そこで出会ったのは外国語として日本語を学ぶ学習者たちでした。彼らがどのように日本語を学んでいるのかに関心を抱いたことが、本実習を履修するようになったきっかけです。

当初はこのような純粋な興味からの出発でしたが、履修を進める中で、日本社会には日本語教育をめぐるさまざまな課題が残されている現実を知りました。

本実習では、NPO 法人の方々や、ボランティアとして地域日本語教室を運営されている方々からお話を伺う機会がありました。その中で特に、来日したばかりの方々に対する集中的な日本語教育の場が不足しているというご指摘を多く耳にしました。来日直後で日本語が十分に理解できないまま学校の教室に入ることを求められたり、すぐに就労しなければならなかったりするなど、学習者が置かれている状況は非常に厳しいものです。

行政は日本語学習を一部支援しているものの、支援できる範囲には限界があり、制度上の理由から支援を受けられない学習者も少なくありません。さらに、日本語が十分に理解できないことによって、支援制度そのものの情報が届かず、周囲に助けを求めることができない方々もいます。このような制度と現場の間に生じるギャップを埋めるために、ボランティアの皆様が活動を続けていらっしゃいますが、これは学習者の生活や人生にも深く関わる重要な課題であり、これが現在の日本語教育を取り巻く現状の一端であると知りました。このような現状がより広く社会に周知され、日本語教育への理解が一層深まり、解決へ向かうことを願っています。

「地域日本語教室調査」から

一年間の実習の中で、「地域日本語教室調査」は特に学びの大きかった活動の一つです。主に夏季休暇期間中、実習生はそれぞれの居住地域にある日本語教室をインタビュー調査し、実際にその教室にボランティアとして参加するという取り組みを行いました。

この活動を通して得た学びは、大きく分けて二つあります。「①日本語教授スキルの向上」と「②自らの固定観念への気づき」です。

①日本語教授スキル向上について、地域日本語教室調査をする前までは日本語文法やコースデザインなどを理論として学ぶ機会は多くありましたが、実際に日本語を教える経験はほとんどありませんでした。本活動では、そのような知識を実践の場で活用する貴重な機会を得ることができました。学習者の日本語をどの程度訂正すべきか、どのような語彙を用いればより理解

しやすい説明になるのかなど、悩む場面も多くありましたが、学習者からの何気ない質問をきっかけに、新たな気づきを得ることもありました。その都度、日本語文法を改めて確認することで、これまで学んできた知識をより深く理解することができ、日本語教授スキルを向上させることができました。

また、その過程で、ボランティアとして日本語を教えていらっしゃる方々の思いを伺う機会があり、②自らの固定観念への気づきにつながりました。それまで私は、日本語学習を始めたばかりの学習者には英語で説明した方が理解しやすいのではないかと考えていました。しかし、地域日本語教室に参加する学習者の中には、英語があまり得意ではない方も多くいらっしゃいます。そのため、ボランティアの皆様は「日本語を使って日本語を教える」という姿勢を大切にされていました。この経験を通して、私は「外国人＝英語が話せる」と無意識のうちに捉えていた自身の固定観念に気づくことができました。

これから

本実習を通して、多様な背景を持つ方々とお会いする機会をいただきました。そのような方々と関わる中で、自身の固定観念に気づき、視野を広げることができたと感じています。

現在、日本国内の在留外国人は増加傾向にあり、社会は絶えず変化しています。そのような社会の一員として、今後も社会課題に関心を持ち続け、自身の視野を広げながら学び続けていきたいと考えています。

日本語教育実習で得た学び

中島 莉子

① 実習で学んだこと

私が本実習を通して最も大切にしたいと感じた学びは、「マイノリティの立場で考えること」です。これまで私は、大学で多様な授業を受講し、多角的な視点で物事を捉えることについて学んできました。その中で、自身でも柔軟に考えることを意識できていると感じておりました。しかし、本実習を通して、理解が表面的なものにとどまっていた部分が多かったことに気づかされました。授業から知識としては理解していたものの、どこかで「当事者ではない自分は、あくまで手助けをする立場である」という意識を持っていたように思います。その意識が、結果として学習者との距離を生んでいたことにも気づきました。ある講義では、母語においては年相応の知識や思考力を有しているにもかかわらず、日本語ではそれが十分に発揮できない場合があり、その結果、学習者の思考力そのものを低く判断してしまう可能性があることを学びました。そこから、学習者を評価する際に、どのような基準で評価すべきかという課題について考えるようになりました。これまで私は、相対的な評価や数値による評価が公平であると考えていましたが、それだけでは学習者一人一人の能力や背景を十分に捉えることができない場合があることを学びました。このような気づきから、一人ひとりの置かれている状況や背景に目を向ける、マイノリティの視点が

これまで以上に重要であると感じるようになりました。一方で、配慮と差別の境界は非常に曖昧であり、知れば知るほど難しい問題であるとも感じました。この課題に向き合い続けるためには、現状に満足することなく、常に学び続け、考え続け、積極的に情報を得ていく姿勢が必要であると考えました。

② ボランティア活動で得た気づきと学び

私は、外国ルーツの方々の就職活動を支援している「一般社団法人グローバル愛知」で、日本語学習のアシスタントとしてボランティア活動を行いました。この活動を通して、日本語教育が言語の習得にとどまらず、学習者が社会の中で安心して行動するための支えとなるものでもあることを学びました。就職活動を行う外国人学生の中には、日本語能力が一定程度あっても、日本社会における暗黙の前提や就職活動特有の慣習が大きな壁となっている場合が多く見受けられました。その結果、孤独感や不安を抱えながら就職活動に取り組んでいる方も少なくないことを強く実感しました。その中で、日本語教室が学習者の「居場所」をつくる役割を果たさなければならないと感じました。日本語を教えることは、単に言語能力の向上を目的とするだけでなく、学習者が安心して自分を表現できる場をつくることでもあるのだと、日本語教室への参加を通して学びました。日本語教室において、適切な距離感を保ちながら関わることで、学習者にとって頼りやすい存在となることの重要性を実感しました。

また、私は支援の場において、「教える」ことに意識が向きすぎるあまり、支援する側とされる側という関係性を強調してしまうことがありました。しかし、私が参加した場では、信頼関係を大切にする姿勢を大切にされていることが非常に印象的でした。まずは話しやすい環境を整え、信頼関係を築くといったコミュニケーションの基本に立ち返ることが、支援の前提として欠かせないものであると感じました。対等な関係を築く姿勢こそが、学習者に寄り添う支援につながるのだと、改めて学ぶことができました。この経験は、物事の捉え方や人との関わり方を見直すきっかけになったと感じています。

③ これからの目標

これまでの実習や大学内での授業支援を通して、多くの方々に支えられながら学ぶ機会をいただきました。日本語教育に関わる授業を担当してくださった先生方や、実際に関わった学習者との関係の中で、支援とは一方的に与えるものではなく、相手の立場や背景を理解しようとし続ける姿勢が不可欠であることを学びました。

今後は、コミュニケーションの基本である信頼関係を大切にしながら、これまで自分が受け取ってきた学びを社会に還元できる人間でありたいと考えています。マイノリティの方々を取り巻く課題に対しても、安易に答えを出すのではなく、状況に応じて立ち止まり、問い直し、認識をアップデートしながら自分の立場でできる支援の在り方を模索していきたいと考えています。

日本語教育実習を通して考えた教育のあり方

橋本 佳澄

1 年間の学び

私が日本語教育課程を履修したきっかけは、日本語教育そのものに強い関心があったからというよりも、教職課程やゼミで英語教育を専攻する中で、「教育」についてもう少し幅広い視点から理解を深めたいと考えたからでした。講義や外部講演会への参加、地域日本語教室でのボランティア活動などを通して、1年を通じて教育の捉え方が少しずつ広がっていったと実感しています。

城北つばさ高校では、日本語授業や通常授業のサポートとして参加させていただき、実際の現場を体感することができました。そこで強く感じたのは、生徒がどんなことに困難を感じているかは一人ひとり異なるということです。日常会話は問題なくできても、文章を読むことや漢字の理解が難しい生徒、単語を音としては理解していても文字と結びついていない生徒、また高校進学時に来日し、日本での生活がまだ長くないダイレクト生、母語での支援が欠かせない生徒など、さまざまな背景や状況をもつ生徒が同じ教室で学んでいました。

そのような状況の中で、先生方が生徒たちの様子をよく観察しながら、その都度支援の方法を工夫している姿が印象に残っています。例えば、重要な情報は何度も繰り返し生徒に伝える、視覚的にわかりやすくする、語学支援員の方々と連携するなど、柔軟な対応が行われていました。こうした場面に触れる中で、「できない」と見えていることの背景にはさまざまな理由があり、それらに寄り添う支援が必要であるということを実感しました。

また、こうした現場での経験は、井澤先生の講義でのお話とも重なり、学びとしてより深く印象に残っています。講義の中では、生徒の日本語の習熟度と思考力は別のものであり、日本語でうまく表現できないからといって、知識がない、内容を理解していないと判断してはいけないという話がありました。この話から、先入観にとらわれず、生徒の本質を捉えようとする姿勢の大切さに気付かされました。また、ルーブリックのような「ものさし」があることで、学習者のどこに支援が必要なのかを考える手がかりになるという点は、現場で見た寄り添う支援のあり方とも結びつきました。

さらに、シンポジウムや地域日本語教室に携わる方々のお話を伺う中で、日本語教育は単に言語を教える場にとどまらず、学習者の居場所をつくり、地域で生活していくための情報や関係性を支える役割も担っていることを知りました。学校、地域、日本語教室といった異なる場で、多くの人が学習者一人ひとりの状況に向き合い、限られた情報の中で試行錯誤しながら支援を考えている姿に触れ、日本語教育の奥深さを実感しました。

実習を終えて

これらの経験から、学習者一人ひとりに向き合い、今見えていることだけでなく、その奥にある背景や状況を想像しながら関わり、学習者を多角的に捉えることの重要性を学びました。初めは、日本語教育は、外国人に向けた特別な支援であり、自分とは少し距離のある分野だと思っていました。しかし、実際に講義や現場で学ぶ中で、日本語教育で大切にされている考え方は、

決して特別なものではなく、学校教育全般や日常の人との関わりにおいても重要なものであると気付きました。本課程で得た視点や考え方は、今後の人生においても大切にしていきたいと考えています。

日本語教育実習を通して

後藤 愛佳

① 実習全体を振り返って

1年間の日本語教育実習では、地域日本語教室や大学の留学生の日本語クラスへの参加をはじめとして、さまざまな活動を経験しました。教室内での授業補助だけでなく、学習者一人ひとりと向き合いながら会話をしたり、学習背景について話を聞いたりする機会も多く、実践的に日本語教育を学ぶことができたと感じています。

まず、私がこの日本語教育実習に参加した理由は、卒業までになにか目に見えるかたちで学びを実感したかったという思いが大きかったからです。大学では講義を受けるだけでなく、実際に現場に出て学ぶ経験を重ねたいと考えていました。そこで、英語と中国語の教職課程を履修していたこともあり、同じ言語教育でも、日本語ではどのような学びが得られるのだろうかという興味から、日本語教育実習にも挑戦することを決めました。正直に言うと、履修前は日本語が母語であるため、英語や中国語と比べて比較的簡単なのではないかと考えていました。しかし、言語学など、日本語教育に関する授業を受講する中で、その考えは大きく変わりました。普段無意識に使っている日本語だからこそ、文法や表現の理由を説明しようとすると言葉に詰まり、自分がいかに感覚的に日本語を使っていたかを痛感しました。さらに、日本語教育実習を通して、学校教育との共通点と相違点の両方を実感しました。どちらも「教育」である点は同じですが、日本語教育では学習者の背景が非常に多様であり、決まった枠組みだけでは対応できない場面が多くありました。同じ教育であっても決して同じものではなく、日本語教育だからこそ、多様な価値観や世界に触れることができたと感じています。

② 学びと成長

この日本語教育実習を通して学んだことは、日本語教育は一方向的に教える場ではなく、「お互いに学び合う場である」ということです。教育は本来対等であるべきだと言いますが、現実には「教える側」、「教えられる側」という関係が強く意識されがちです。実際に教職課程での教育実習を経験した際には、その上下関係を強く感じる場面もありました。しかし、日本語教育実習では、指導者と学習者が対等な立場で関わっていると感じる場面が多くありました。特に国外実習や地域日本語教室では、学習者との距離が近く、会話を通してその人自身を知る機会が多くありました。日本語を教えているはずの私が、文化や生活習慣、考え方など、さまざまなことを学習者から教えてもらっていると感じる場面も少なくありませんでした。この経験から、日本語教育は知識を一方向的に与える場ではなく、言葉を通して価値観や考え方を交換する場なのだ

気づきました。学習者の発言や反応を通して、自分の考えを見直すこともあり、日本語教育が双方向的な学びの場であることを強く実感しました。

また、積極的に人と関わる姿勢が身についたと感じています。日本語教育は、学校教育と比べると、学習者の年代、性別、国籍、生活背景が非常に幅広い分野です。学生だけでなく、社会人や高齢の方が学習者になることもあり、同じ価値観を持つ人ばかりが集まるわけではありません。そのため、「同じ人は一人もいない」という前提で関わる必要があります。待っているだけでは関係は深まりません。自分から声をかけ、相手に関心を持ち、その人を知ろうとすることで、少しずつ信頼関係が築かれていくのだと学びました。そして、相手を知ってこそ、学習者がどのようなことに困っているのか、どのような学びを必要としているのか知ることができます。お互いに良い学びができるためにも、積極的にコミュニケーションをとることが大切だと感じました。

③ これから

私は「教えること」の難しさと同時に、「学ぶこと」の楽しさを改めて実感しました。相手に伝えるためには、自分自身が理解していなければならず、その過程で自分の知識も深まっていきました。また、日本語教育は言語を教えるだけでなく、人と人をつなぎ、互いの違いを理解し合う場であると強く感じました。高校の日本語クラス支援に参加した際には、日本語だけを使うことにこだわるのではなく、相手を理解するために学習者の母語を使うことも有効であるということが印象に残っています。日本語を学んでいるからといって、日本語だけで話さなければならないわけではなく、母語を介することで、学習者が安心して自分の考えを表現できる場面もありました。外国語学部で英語や中国語を学んできた経験は、日本語教育においても大きな強みになると感じています。学習者の立場に立ち、「分からない気持ち」を理解できること、そして必要に応じて母語を用いて支援できることは、日本語教育の現場で大きな助けになると考えます。

今後、在日外国人はさらに増加していくと予想され、日本語教育の重要性はますます高まっていくと思います。私自身、将来そのような方々と関わる可能性のある場所で働くため、この日本語教育実習で得た経験や学びを、今後の進路や社会生活の中で活かしていきたいです。

日本語国内実習での学び

小中 桃恵

実習を履修したきっかけと活動内容

日本語国内実習に参加した背景には、もともと外国人と関わることへの興味があったこと、そして英語の教職課程を履修していたことがあり、一緒に日本語教員課程も履修してみようという軽い動機で履修しました。しかし、講義、地域日本語教室調査、大学の授業見学などを通して、多様な日本語教育の現場に触れることができました。こうした授業での活動から、当初は資格取得のためと思っていた実習が、想像以上に大きな学びにつながったと感じています。

実習ではまず講義や講演会に参加し、愛知県に住む外国人住民の実態や、日本語教育を

取り巻く社会的背景について学びました。そこで特に印象に残ったのは、日本語教育では、外国人=教えられる側という一方の関係性ではなく、学習者も指導者も対等な立場で、相互に学び合う存在であるという視点です。自分自身の無意識に持っていた上下関係があるという思い込みに気づきました。また、日本語教育は単なる言語教育にとどまらず、外国人が地域社会の中で共生していくための居場所として重要な役割を果たしていることも理解しました。

地域日本語教室調査は、約 3 か月にわたり活動に参加し、実際に学習者と関わりながら教室の様子や活動内容について調査するもので、私は 2 つの教室を見ました。そして、1 つの教室では学校で日本語が必要な子どもや、学び直しをしたい大人が参加していましたが、もう一方の教室では地域交流の場としての側面が強く、会話を中心とする活動が行われており、教室に通う学習者と指導者のタイプも大きく異なることが分かりました。また、ほかの教室の調査のお話を聞くと、内容や目的が千差万別であり、日本語教育と一口に言っても、教室によって目的、対象者、学習背景が大きく異なり、求められる支援も様々であることを実感しました。また、地域日本語教室に継続的に参加していくと、学習者の定着の難しさ、ボランティアの人手不足や負担の偏り、資金や場所の確保といった現場の課題もあるとわかりました。大学の日本語クラスの見学では、学習内容がレベルや目的に応じて分けられており、見学した授業では、日本の文化と自国の文化を比較して紹介する活動が行われていました。地域教室とは教え方、教える内容が異なることが分かりました。

実習を通して得た学び

実習全体を通して私が学んだことは、相手の立場に立って理解し、対等な関係で話し合う姿勢の重要性です。日本語教育の現場は多様であり、そこには一つの正解や理想的な形があるわけではありません。多様な背景を持つ学習者に対応するためには、自分の価値観や前提を見つめ直し、相手の視点を理解しながら関わっていく必要があると感じました。

地域日本語教室調査では、実際に学習者と関わる中で、学習者の視点に立つことが難しいと感じました。地域日本語教室の調査をしている際、なかなか教室に来られなくなってしまう学習者が何人かいました。私は学習のモチベーションが低くなったのかと短絡的に考えてしまいましたが、実際は仕事の時間が遅いことや家族の都合などさまざまな背景によって来られなくなるのだとわかりました。地域日本語教室ではそうした学習者の状況を把握するために話し合いが行われていました。

また、日本語教室は指導者やコーディネーター誰か一人ではなく、さまざまな人が話し合って支えられているとも分かりました。地域日本語教室の授業後には、ボランティア同士で学習者の状況や、授業の進捗や学習者の反応を共有し、次回の活動を調整するサイクルがありました。このように話し合いを通じて、教材づくり、生活情報の提供、進路相談の橋渡しなど、支援が重層的になっていき、学習者学習者に向き合っているのだと分かりました。また、シンポジウムや講演会では現場の課題が共有され、多様な立場の人が意見を出し合っている様子を見ました。日本語教育は専門家だけでなく、さまざまな立場の人が話し合い、協力することで成り立つ活動であることを感じました。

実習を終えて

多様な学習者や教育現場を体験した今回の実習は、当初の軽い動機を超えて、様々な価値観に触れることで、私自身の考え方が変わる経験となりました。相手の背景を想像し、言葉の背後にある経験や事情に耳を傾けることは、今回の実習で得た最も大きな学びの一つです。このことは、日本語教育に限らず、今後、仕事や人生などでたくさんの外国人や外国に関することに関わり続けていきたい自分にとって、大きな学びだと感じています。まだ難しい部分もたくさんありますが、これからも、実習で学んだことを糧に、これからもっと相手の視点から考える姿勢を大切に、多様な人々が暮らす社会づくりに貢献できるような関わり方を続けていきたいです。

実習を通して学んだこと

北村 しをり

① 実習全体の学び

1 年間の実習を通して、日本に住む外国人住民の状況や日本語教育の現況、それらを取り巻く社会的課題について学びました。実際に外国人支援や日本語教育に携わっている方々からお話を伺ったり地域日本語教室に参加させていただいたりするなかで、外国人住民が持つ背景は非常に多様であり、抱えている課題も複雑に絡み合っていることを知りました。

その中で特に印象に残っているのは、日本語教育では学習者と支援者は対等な関係であるということです。これまで私は日本語を教える支援者と教わる学習者というイメージを持っていましたが、日本語教室に携わる方々から、学習者と支援者は対等でありお互いに学び合う関係であるというお話を伺いました。そして実際に地域日本語教室に参加させていただいたことでそれを実感することができました。参加させていただいた教室が会話の習得を目的としたものだったこともあり、教室では非常に活発にコミュニケーションがとられていました。日本語教室という場所を訪問することが初めてであったため最初はとても緊張しましたが、回数を重ねるごとに、学習者の方々と会話することが楽しみになっていきました。様々な国から来日されている学習者の方々から、母国の文化や日本で印象に残っている物事についてお話を聞かせていただいたことで、支援者である私も多くのことを学ぶことができました。

この経験から、相手との対話を通してお互いに学び合う姿勢の大切さを学びました。日本語教育の現場は多様であり、1 つの正解があるわけではありません。だからこそ、1 人ひとりと対話を重ねることにより相手の背景や価値観を知り、相手の立場や視点を考えることが必要なのだとわかりました。また対話を通してその人が持つ価値観を知ることで、自分にはなかった考え方に気づかされると同時に、自分が持つ価値観や先入観にも気づくことができました。多角的な視点を持ち柔軟に考える姿勢も、この実習を通して身につけたことの 1 つだと感じています。またその中で、地域日本語教室が単なる学習支援の場にとどまらず、人と人とのつながりが生まれる場となっていることも実感することができました。

② これからの地域社会と日本を生きていくために

この実習の中で地域日本語教室に参加させていただいたことで、地域社会では様々な背景を持つ外国人住民が共に生活していることを身をもって知ることができました。その中で、国籍や民族に関わらずお互いの文化や価値観を尊重しながら共に生活できる多文化共生社会を目指すために、まずは相手と話し、相手のことを理解しようと努力する姿勢が大切であると感じました。外国人として一括りにしたり、先入観により判断したりするのではなく、一人ひとりと向き合い相手の立場を理解しようとしながらコミュニケーションをとる姿勢が必要だと考えています。地域日本語教室では、やさしい日本語を使うだけでなく、写真やイラストを用いたりジェスチャーで表現したりと様々なコミュニケーションの方法を学ぶことができました。また、自分が伝えようと試行錯誤している時には、相手も理解しようと努めてくれていると感じることができました。話しかける勇気を持つこと、相手のことを理解しようとする姿勢を持つことが、共に支え合う地域社会をつくるための一歩になるのではないかと考えています。

③ 今後に向けて

1年間の実習の中で、この実習がなければ経験できなかったであろうことを多く経験することができました。日本語教育に関する知識を得ることができただけでなく、多くの方々と関わる機会をいただいたことで、相手との対話を通して互いに学び合う姿勢の大切さを学ぶことができました。また、多様な価値観に触れることができ、自分が持っていた先入観や固定観念にも気づくことができたと感じています。このことは、今後社会の一員として生活していく上でも大切なことだと感じています。この実習での経験を糧に、学び続ける姿勢を大切に、成長し続けていきたいです。

日本語教育実習を振り返って

横江 隆弘

実習全体の学び

本実習では、日本に移住、定住する外国人住民を取り巻く社会的背景や愛知県における外国人住民の生活実態を学習するとともに、日本語教育に実際に携わっている方々の講義に参加し、現場で直面している課題や支援のあり方について理解を深めた。特に、地域日本語教育が果たす役割や、その持続可能性に関する問題意識を得られた点は大きな学びであった。

実践活動としては、名古屋国際センターの地域日本語教室に数か月にわたり参加して、日本語教育現場の実情を体験的に理解するとともに、日本語学習者一人ひとりの学習目的や生活背景の多様性に触れた。また、本学で開講されている留学生向けの日本語授業にアシスタントとして参加し、留学生の日本語学習に対する意欲と習得課程を間近で見える機会を得た。学習意欲の高さや習得の速さに驚かされる一方で、サポーターとしての関わり方も十分に経験できた。これらの経験を通して、地域や大学で様々な日本語学習機会が提供されていることを実感

したが、一方では支援がまだまだ十分ではないことや学習機会へのアクセスに格差があることも課題として認識した。

一年にわたって実感したのは、実習で関わった学習者は、比較的日本語学習環境に恵まれ、学習意欲も高いことだ。そのために、学習効果もかなり高いと考えられる。しかし、私自身の力量不足や事前準備の不足が原因で、主体的に日本語を「教える」という経験が限られていた点は残念である。今後も引き続き、試行錯誤しながら日本語教育における教授力、実践力のレベルの向上を図っていきたい。

これからの地域社会、日本社会で生きていくために

本実習を通して、地域社会の中に多様な背景をもつ外国人住民が生活し、日本社会を支えてくれていることを具体的に理解することができた。しかし、日本語学習に積極的に参加できる人だけでなく、就労や生活上の制約から学ぶ機会を得られない人、日本語の学習に興味を持っていない人いる現実も知ることができた。外国人住民を一括りにせず、個々の背景を考慮し、多文化社会の実現に向けた相互理解と彼らの支援のあり方を考えていく必要性を強く感じた。

後輩に向けて

本実習は、日本語教員課程のカリキュラムの中では、必修科目であるので、日本語教育を学ぶ上で基盤となる。講義と実習を通じて、理論と実践を結び付けることができることが大切である。また、地域日本語教室など大学外の活動は、主体的に関われば関わるほど学びが深まる。将来、日本語教師になるかどうかに関わらず、学習者や地域と関わる経験は、自身の視野を広げる上で大きな財産となる。前述のとおり、本実習では、日本語教授の実践機会は十分とはいえないので、日本語教師を目指す方には、並行して開講されている「日本語教育実習(国外)」を履修することを特に勧めたい。負担の大きい実習であると思うが、何物にも代えがたい経験ができることは間違いないと思う。

実習から学んだ人との向き合い方

里見 和奏

① 実習に参加したきっかけと学びへの姿勢

私が本実習に参加したきっかけは、グローバル化が進む中で、教養として日本語教育に関する知識を身につけたいと考えたことでした。さまざまな国や背景を持つ人と関わる機会が増えていく社会の中で、日本語教育について理解しておくことは、今後どのような進路を選んだとしても役立つのではないかと考えました。また、学科の専門科目を受講する中で、日本に来て日本語を学んで生活している人たちは、それぞれの目的や目標を持ち、努力を重ねているという印象を受けました。そのような方たちの力に少しでもなれるような知識や関わり方を身につけたいと感じるようになり、実習への関心がより強まりました。実習が始まるまでには、日本語教育に関す

る必修科目を多く履修し、知識をインプットする学習が中心でした。難しいと感じる内容も多くありましたが、「分からなかったことが分かるようになった」、「できなかったことができるようになった」と実感できた瞬間はとても嬉しく、自分自身の成長を感じることができました。教える立場を意識して学ぶ中で、知識や技術が少しずつ身についていると感じられたことは、大きな励みになっていたと思います。

② 人との関わり方の変化と実習で得た気づき

実習を通して、私自身の人との関わり方にも変化があったと感じています。これまでは「自分は自分、他人は他人」という意識がどこかにあったように思います。しかし、実習の中でさまざまな人と関わるうちに、「この人はどんな考え方を持っているのだろう」、「どのような経験をしてきたのだろう」と、相手そのものに関心を持つようになりました。相手の背景や価値観、視点を知ることで、自分にはなかった考え方に気づかされることが多くあり、自分の世界が少しずつ広がっていく感覚がありました。その影響もあり、以前よりも自分から相手のことを知ろうとしたり、質問をしたり、話を聞いたりする姿勢を持てるようになったと感じています。また、日本語ボランティアや学習者支援に関わる方々と接する中で、自分のことだけでなく、周囲の人のことを考えて行動している人が多いという印象を持ちました。相手と共に成長することに喜びを感じている姿がとても印象的で、「こういう人でありたい」と自然に思うようになりました。今後も、そうした人たちとつながりながら、人との関わりを大切にできる人でありたいと感じています。

③ 今後に生かしたいこと

私は将来、日本語教員という職業に就く予定ではありませんが、この実習を通して、「相手を尊重する姿勢」の大切さを強く実感しました。相手との違いに対して距離を置くのではなく、もう一歩近づいて話を聞き、「そういう考え方もあるのだ」と受け止めながら、自分の考えも伝え合える関係を築いていくことが大切なのだと感じるようになりました。今後、社会人としてさまざまな人と関わっていく中で、自分の中にある先入観や偏見を一度立ち止まって見つめ直し、それをいったん脇に置いたうえで相手と向き合う姿勢を大切にしていきたいと思っています。そうした姿勢が、良い人間関係を築くための第一歩になるのではないかと感じています。この一年間の実習を通して得た学びは、日本語教育に関する知識だけでなく、人と向き合う姿勢や、自分自身の考え方の変化だったと思います。この経験を大切にしながら、周囲の人と丁寧に関わり、少しずつでも成長し続けていける社会人になれるよう精進して参ります。

実習を通して学んだこと

永淵 琴子

① 実習全体の学び

実習全体を通して学んだことは、日本語教室は支援者から学習者に日本語を教えるという

一方的な支援の場ではなく、支援者も学習者から多くのことを学ぶ場であるということです。実習の一環で私も地域の日本語教室に支援者として参加しました。実際に参加してみて、私は「日本語を教えに行く」という意識よりも、多様な国から日本に来た学習者から今日はどういう話が聞けるのだろうか、という楽しみな気持ちでボランティア活動を行っていました。日本語教室に参加するまで、日本語教室は学校のように教師が生徒に教える、授業形式だと思っていました。しかし、私が参加した教室は基本的にマンツーマンで会話を楽しむものだったので、学習者の母国の文化や価値観をお話いただいたり、学習者が母国に帰国した際の写真を見せていただいたりする中で、学習者から支援者の私も多くのことを学ばせていただきました。地域日本語教室への参加を通して、日本語教室は支援者と学習者がお互いに学び合う場であることを知り、多様な価値観を理解する姿勢を学びました。

② これからの地域社会・日本社会で生きていくために

近年では日本での外国人住民が増加傾向にあり、多様な背景を持つ外国人が日本で暮らしています。これから外国人と共生して日本社会をよりよくするために、外国人住民を母国や母語が異なる存在として一括りにして捉えるのではなく、一人ひとりが相互理解への姿勢を持つことが大切だと考えています。そのためには、「やさしい日本語」を使って会話をする工夫や相手の立場に立って考える姿勢が重要になると思います。日本語教育の場は、日本語学習を通して地域住民など、周囲の人々と関係を築ききっかけとなり、地域社会に参加するための重要な役割を果たしています。日本語教育を通じて、相互理解の姿勢を支援者も学習者も身に着けることで、共に支え合う地域社会をつくることができると考えています。

③ 後輩に向けて

日本語教育課程は多くの授業を履修する必要があることや、実習中は外部の講演に参加するなど、大変なイメージがあるかもしれませんが、実習を通して、今まで行動することができなかったことをたくさん経験することができました。地域日本語教室や県大日本語クラスに参加し、実際の日本語教育の現場を見て経験したこと、また外国にルーツを持つ学習者と出会い、交流したことはとても良い経験となりました。実習を履修したからこそできる経験が多くあることも国内実習の魅力だと感じています。また、実習では日本語教育の知識を深めるのはもちろん、多様な価値観を理解する姿勢など、日本語教育以外の場面でも役立つ考え方を身に着けることができます。将来日本語教師になるかどうかは大事ですが、悩んでいる方はぜひ履修することをおすすめします。実践的な学びを通して、日本語教育のことだけでなく、多文化共生や相互理解についても学びを深めることができます。

日本語教育実習で得た学び

西坂 茉那

① 実習全体の学び

日本語教員課程の実習を通して、私は「教えること」の難しさと同時に、支援者としてどこまで関わるべきかという問いに向き合う経験を得ました。特に、地域日本語教室でのボランティア活動と、大学での留学生クラス支援の経験は、自分の関わり方を深く考えさせられる機会となりました。

地域日本語教室では、主に中学生が通う教室に参加しました。そこには、母国では勉強ができていたにもかかわらず、日本の中学校ではテストで思うように点数が取れず、自信を失い、ふさぎ込んでいる生徒が多くいました。学習意欲が低下している様子を前にして、「勉強した方がいいよ」と励ますことが本当にその子のためになるのか、どこまで私が介入してよいのか分からず、戸惑いを感じました。日本語を教えること以前に、学習者の気持ちや置かれている状況にどう寄り添うべきかという課題に直面した経験でした。この経験を通して、私は、日本語教育が単に学力を向上させるための支援ではなく、学習者の自己肯定感や将来への意欲とも深く関わっていることを学びました。正解を与えることだけが支援ではなく、学習者が自分の力を信じられるように関わる姿勢の重要性を実感しました。

また、大学での留学生クラス支援では、わからない表現や、「言いたいことはあるが、日本語でどう表現すればよいかわからない」という場面に数多く直面しました。その際、どこまで言葉を補ってよいのか、どこからは学習者自身に考えさせるべきなのか、その線引きに悩みました。助けすぎれば学習の機会を奪ってしまう一方で、支援が不十分であれば理解を妨げてしまうという難しさを感じました。

これら二つの経験から、私は日本語教育において最も重要なのは、「正しく教えること」だけではなく、「学習者の自立をどのように支えるか」であると学びました。支援のあり方に迷い、試行錯誤を重ねた経験そのものが、自分にとって大きな学びとなりました。

② これからの地域社会日本社会で生きていくために

これから日本に住む外国人は、今後ますます増えていくと考えられます。そのため、地域社会や日本社会全体において、異なる言語や文化的背景を持つ人々と共に生きていく姿勢が、これまで以上に重要になると思います。日本語教員課程での学びを通して、私は「日本語を教えること」は単に言語を伝えることではなく、学習者一人ひとりの背景や立場を理解し、相手の視点に立って関わるということが不可欠であると実感しました。言葉の誤りを正すだけでなく、なぜその表現が必要なのか、どのような場面で使われるのかを丁寧に考える姿勢は、地域社会で外国人と共に生活する上でも重要な態度であると感じています。今後、地域の中で外国人住民と関わる場面は、職場や学校、行政窓口など、さまざまな場所で増えていくと考えられます。そのような中で、日本語教員課程で身につけた、相手の立場に立って考える力や、多様な価値観を尊重する姿勢を活かし、互いに支え合える地域社会の形成に貢献していきたいと思っています。

③ 後輩に向けて

私は、大学3年生から日本語教員課程を履修しました。1、2年生の間は全く履修を考えていなかったため、3年生で多くの単位を一度に取ることになり、決して楽ではありませんでした。しかし、その分、短期間で集中的に学ぶことができ、日本語教育の奥深さや、自分自身の成長を実感することができました。後輩の皆さんに伝えたいのは、「始める時期よりも、学ぶ姿勢が大切である」ということです。途中からのスタートでも、意欲を持って取り組めば十分に学びを深めることができます。日本語教員課程で身につく、相手の立場に立って考える力や、言葉を通して人と向き合う姿勢は、将来どのような進路に進んでも必ず役に立つと思います。大変なことも多い課程ですが、それ以上に得られるものは大きいはずです。ぜひ、この学びを自分自身の糧として、大切にしてほしいと思います。

4. SA からのコメント

日本語教育実習には毎年、前年度以前にすでに実習を修了した SA (Student Assistant) の方々が参加し、実習のサポートをしてくださっている。今年度の実習を支えてくださった SA3 名からのコメントを掲載する。

米山 茄穂

今年度は日本語教育実習(国外)に参加するとともに、SAとして日本語教育実習(国内)に関わることができました。みなさんの意見を聞いたり、振り返りのまとめを行ったりするなかで、実習生のみなさんが授業や地域日本語教室、留学生日本語クラスでの経験からたくさんのごことを考え、学びを得る姿をみることができました。1年間お疲れ様でした。

村林 芽明

昨年度は実習生として、今年度はアシスタントとして本実習に参加いたしました。授業内での実習生の皆さん同士の意見交換や各回の振り返りを通して、私自身も昨年の学びを思い返しながらも、新たに多くのことを学ばせていただきました。

皆さんのこれからのさらなるご活躍を心からお祈りしています。1年間、本当にお疲れ様でした!

澤田 瑠依

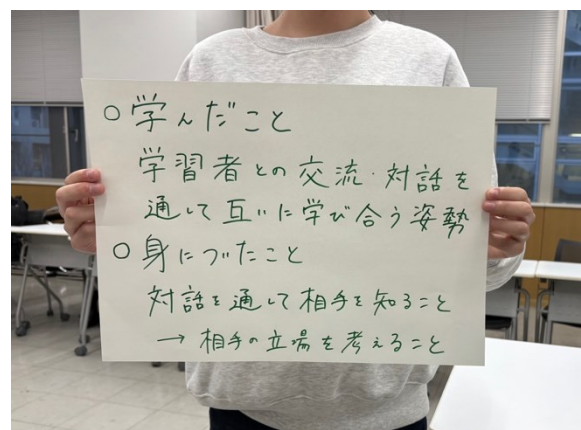
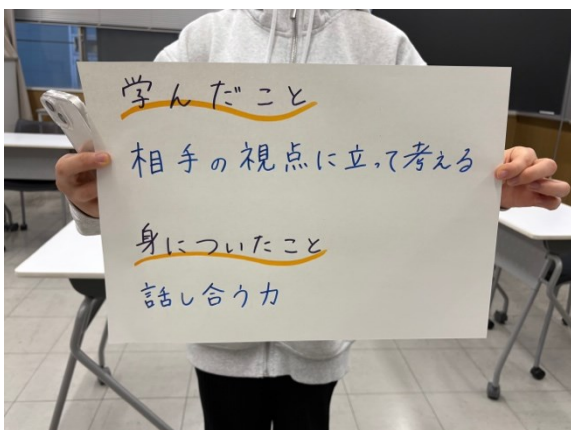
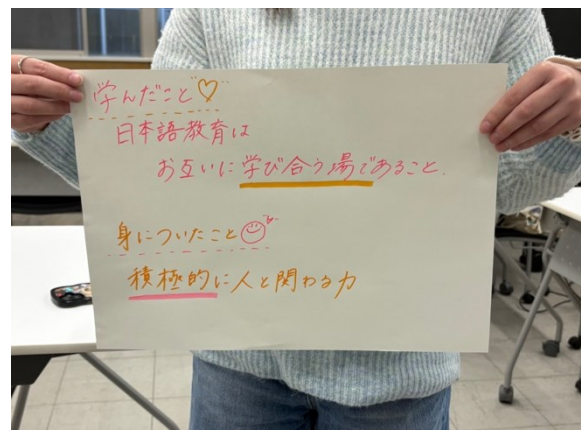
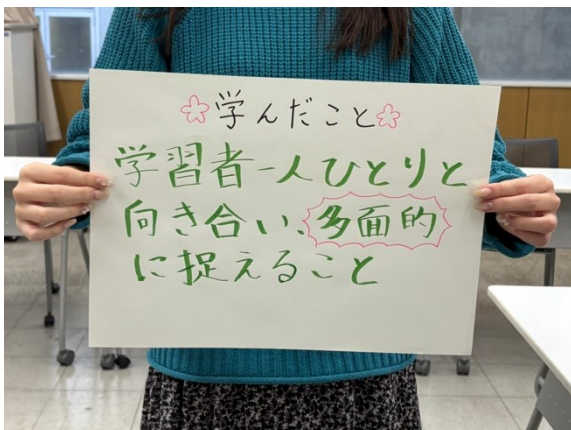
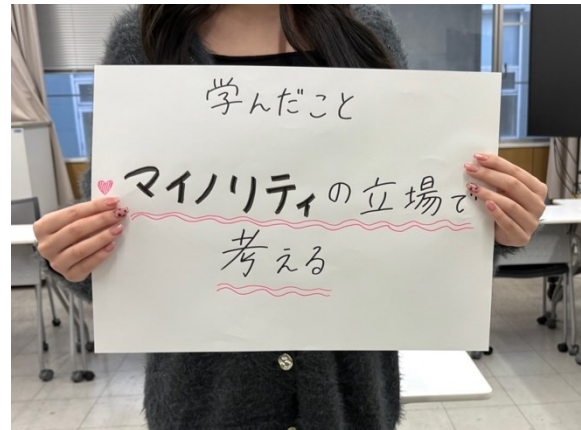
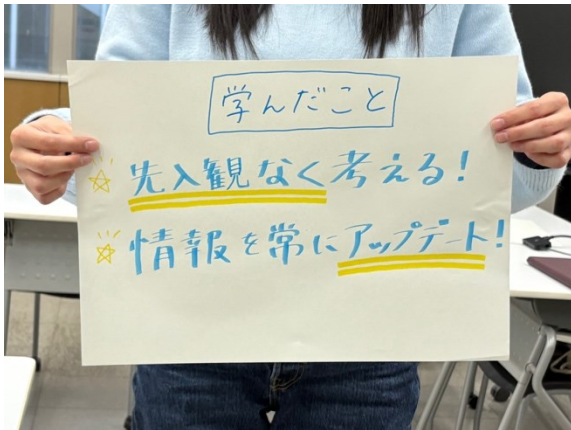
この1年間、アシスタントとして実習に参加させていただきました。アシスタントという立場ではありましたが、実習生の皆さんとともに学び、私自身も新たな気づきや発見を得ることができました。

実習生の皆さん、1年間お疲れ様でした!本実習での経験が、皆さんのこれからの人生に少しでも生きることを願っています。

5. 一年間の学び


日本語教育実習（国内）の最終授業日に、実習生は一年間の実習を通して学んだことや身についたことを一枚の紙にまとめて発表した。

以下、その内容を掲載する。



学びには、
たくさんの学びがあり
いろいろな経験として
自分の肌で感じて下さい。

<学んだこと>
★「関わり合いの中で相互理解が
進む」
<将来生かしたいこと>
★「対話を通して成長し合える学びの場
づくり」
学習者の方と関わる経験を大切にしたい



<学んだこと>
日本語教室は支援者と
学習者が互いに学び合う場
<身につけたこと>
多様な意見を受け入れること
発信すること

学んだこと
互いに学び合うこと
身につけたこと
・相手の立場に立って考える力
・言葉を通して人と向き合う姿勢
後輩へ
日本語教育の中には正解が少ないものが多いですが、
たくさんの人に関わり、支え合うことでみえてくるものもあるはず
です。大変には思いますが、頑張ってください。

II. 国外実習

1. 2025 年度「日本語教育実習（国外）」概要

横江 隆弘

① 授業の概要と渡航までの準備

本実習は、日本語教員課程のカリキュラムの中では選択科目であり、「日本語教育実習（国内）」を履修中、もしくは履修済みの学生のみ、参加することができる。2023 年度から台湾の東海大學を拠点として行われており、今回は 3 回目の台湾での実習となった。本年度は、5 名の学生が参加した。

以下、シラバスより授業概要、授業計画の部分から一部抜粋して引用する。

■授業概要

海外における日本語教育機関（東海大學（台湾））を拠点に、約 2 週間の日本語教育実習を行う。5 月より実習の準備期間として、日本語授業の教案作成、および、日本文化紹介に関する教室活動案作成に取り組む。実習では、前半は、東海大學の大学院生、学部生、甲南大学の学部生とともに、国際共修としての実習を実践する。毎回の授業のあとに、ふりかえりのディスカッションを行い、自分自身の学びについて客観的に分析する。授業の準備やふりかえりでは、実習生同士で相談し、アドバイスをし合い、お互いに自身の学びを共有することにより、学びのプロセスについても考察を深める。実習の記録は、TEAMS を活用して蓄積する。

後半は、台湾のいくつかの日本語学習現場の見学と、実習をおこなう。

■授業計画

- A) 地域の高校生、大学生、一般の日本語未修者を対象としたクラス
 - B) 日本語クラス参加者に加え、大学生や地域の人を対象とした日本文化紹介
 - C) 台湾の一般市民、もしくは高齢者を対象とした日本語教室の見学及び実習
- (中略)

帰国後、ふりかえりレポートを作成し、ふりかえりの授業を行う。学内での成果発表会で学習成果を発表し、まとめとする。

こうした実践のために、実習参加者は 5 月までに決定された。特に三大学で実施する A) の「日本語キャンプ」は、東海大學 6 名、甲南大学 4 名、愛知県立大学 5 名の実習生 15 名での活動であり、三大学の教員 4 名による指導体制がとられた。5 月 28 日に第 1 回目の全体会議で顔合わせをしてから、三大学混合の 2 班（入門、初級）に分かれて作業を開始し、オンライン会議を開いて準備を進めた。これについては、三大学の活動全体をまとめた『2025 年夏季日本語キャンプ 東海×甲南×愛知縣立』が、別途作成されている。また、動画としてもまとめられている（右上 QR コード参照）。B) は、国立聲南国際大學附属高等学校



において、折り紙による日本文化の紹介を行った。C)は、台中市内の高齢者を対象とする「長青学苑」、および一般の語学学校である YMCA のクラス見学と交流活動を実施した。これらの事前準備は教員が打ち合わせを進め、学生は現地において準備する段取りになった。

また、渡航ガイドンス(6月18日)では、教員から海外における留意点、健康管理、生活、通貨、持ち物などの注意事項について説明を受け、参加学生全員で共有した。さらに、学生支援課主催の危機管理セミナーへの参加も確認された。

② スケジュール

台湾での実習の日程は、以下の表の通りである。授業活動としては、8月19日～9月2日までの15日間の日程となった。今回の実習は、「日本語キャンプ」、「日本文化の紹介」、学外の日本語教室への見学参加、市内観光すべてを台中市及びその近郊でおこなった。

国外実習 日程表				
	月日	曜日	宿泊地	内容
	2025/8/15	金		終日 「日本語キャンプ」3大学の班ごとに直前打ち合わせ
	2025/8/16	土		終日 「日本語キャンプ」3大学の班ごとに直前打ち合わせ
	2025/8/17	日		
	2025/8/18	月		
1	2025/8/19	火	東海13.8民宿	7:50セントレア出発ロビー集合 CI 151 出発(飛行機→タクシー) 東海大学
2	2025/8/20	水	東海13.8民宿	「日本語キャンプ」3大学打ち合わせ 授業準備
3	2025/8/21	木	東海13.8民宿	AM:実習 PM:ふりかえり 翌日の授業準備
4	2025/8/22	金	東海13.8民宿	AM:実習 PM:ふりかえり 翌日の授業準備
5	2025/8/23	土	東海13.8民宿	AM:実習 PM:ふりかえり 翌日の授業準備
6	2025/8/24	日	東海13.8民宿	作戦会議
7	2025/8/25	月	東海13.8民宿	AM:実習 PM:ふりかえり 翌日の授業準備
8	2025/8/26	火	東海13.8民宿	AM:実習 【成果発表会】 PM:ふりかえり (うちあげ)
9	2025/8/27	水	東海13.8民宿	台中市見学または翌日以降訪問時の準備
10	2025/8/28	木	東海13.8民宿	AM:台中YMCA教室見学と交流活動(大カタ加先生) PM:フリー (記録、休憩、観光など)
11	2025/8/29	金	東海13.8民宿	AM:長青学苑教室見学と会話練習(農志琳先生) PM:フリー (記録、休憩、観光など)
12	2025/8/30	土	台中館Hotel Initial-Taichung	AM:台中市繊維工芸博物館 PM:霧峰林家花園
13	2025/8/31	日	今埔里渡假大酒店 (南投縣埔里)	終日 観光 台中駅→タクシー→九族文化村、日月潭 →路線バス →埔里
14	2025/9/1	月	洛基大飯店新仕界 (台北市)	AM:PMの学校訪問準備 PM:国立暨南国際大学附属高等学校 折り紙などによる文化交流 →バス移動→台北市内
15	2025/9/2	火		AM:台北市内(各自自由行動) 【帰国など】台湾桃園空港発 → 解散

2. 「日本語キャンプ」報告書（東海大学版）からの抜粋

小中 桃恵・里見 和奏

甲南大学・東海大学・愛知県立大学の3大学で報告書を作成した。

東海大学日本語文化学系のウェブサイト「国際交流専区」に「2025年 甲南日文営」として報告書（全109ページ）が掲載されている。



【https://nihongo.thu.edu.tw/int-exchange/wp-content/uploads/2025_日語學習營報告書.pdf】

本報告書では、その中から一部抜粋引用をして掲載する。

また、「日本語キャンプ」が行われたことについて、東海大学ホームページの「東海新聞」に掲載されている。



「東海攜手日本甲南、愛知縣立大學 以 SDGs 轉化語言學習」

【<https://www.thu.edu.tw/web/news/detail.php?cid=23&id=4470>】

募集ポスター（『「日本語キャンプ」報告書』p.7より抜粋）



The poster features a light orange background with a cherry blossom branch in the top left corner. At the top right is the logo for Tohoku University's Higher Education Deepening Project, which includes a stylized 'H' and the text '東海大學 高等教育深耕計畫 Tohoku Higher Education Sprout Project'. The main title '2025 日本語學習營' is prominently displayed, with the character '日' inside a red circle. Below the title, it lists the participating institutions: '東海×甲南×愛知縣立大'. The central text describes the camp as a chance to spend the end of the summer vacation with Taiwanese and Japanese university students, learning Japanese and Japanese culture. A teal rounded rectangle contains the dates (8/21-8/23 and 8/25-8/26), time (09:00-12:00), and location (Tohoku University). Below this, a red text box states the registration deadline (6/30) and provides a QR code. A list of bullet points details the camp's features: free of charge, limited to 60 spots, open to all ages and skill levels, and requires full participation. At the bottom left, contact information for the organizer, Nina Huang, is provided, including her LINE ID and phone number. On the bottom right, there is an illustration of a traditional Japanese building with a red facade and a green tiled roof.

東海大學
高等教育深耕計畫
Tohoku Higher Education Sprout Project

2025 日本語學習營
東海×甲南×愛知縣立大

一起在暑假的尾聲，和台灣與日本的大學生
認識日本文化、快樂學日文

日期：8/21(四)~8/23(六)
8/25(一)~8/26(二) 共五日
時間：09:00~12:00
地點：東海大學

報名請掃描下方QR-CODE並加入班級群組，6/30(一)截止

- 完全免費，限額60名，額滿截止
- 年齡、程度不限，歡迎零基礎與初學者參與
- 需全程參與活動

報名表

班級LINE群組

負責人：黃宥妮
LINEID：nina90101314
電話：04-23590121#31713
(日文系—張瑜珊老師辦公室)

日本語キャンプの参加者を募るポスターである。小学生から80代まで、幅広い年齢の学習者が集まり、約48名を「クラス1 未修者」、「クラス2 既修者」の2クラスに振り分けた。

参加者名簿（『「日本語キャンプ」報告書』p.8より抜粋）

參與人員名單

		東海大學	甲南大学	愛知県立大学
指導老師		張瑜珊 菅田陽平	野々口ちとせ	東弘子
參與實習生	クラス1	黃宥妮 蕭定弘 蔡宇涵 李柔葳	北野奏真 坪井咲乃	小中桃恵 米山茄穂
	クラス2	張本薪 鄭惟仁	佐藤永 松浦泰征	里見和奏 後藤愛佳 横江隆弘

東海大学の教員 2 人と学生 6 人、甲南大学の教員 1 人と学生 4 人、愛知県立大学の教員 1 人と学生 5 人で授業計画や教室運営を行った。準備は 5 月末から始まり、オンライン会議で打合せを重ね、教員からの指導を受けながら計画を練っていった。

未修者クラスの授業概要（『「日本語キャンプ」報告書』p.15～16より抜粋）

2025年 Iクラス 日程と担当一覧

全体のテーマ：旅行 実際に見えるフレーズを学ぼう

	1 限目 9:00～9:50	2 限目 10:00～10:50	3 限目 11:00～11:50	午後 14:00～
8/21(木) ・50音/あいさつ/数字の学習 ・環境に関する単語の学習	自己紹介 50音 文法紹介	復習 アイスブレイク 数字を学ぶ(1から10) 私は○○です ○○から来ました ○○が好きです よろしく	数字の復習 (1から10) 数字を学ぶ 2 (25,2000,2025) ピンゴする 環境についての文法 と単語を紹介(これは○○です)	反省会 次の日の授業 内容の確認と 教具の準備
	MT:黄宥妮、北野奏真 AT:全員	MT:黄宥妮、北野奏真 AT:全員	MT:黄宥妮、北野奏真 AT:全員	
8/22(金) ・買い物表現の学習 ・模擬市場	先生の自己紹介 一日目の復習 キーワード:市場 錦市場の紹介	文法紹介(これです、これですか?どれですか?おすすめはどれですか?これください) 数量の単語 会話を練習する	会話を復習する 模擬市場をする 食べ歩きについてを紹介	反省会 次の日の授業 内容の確認と 教具の準備
	MT:小中桃恵、蕭定弘 AT:全員	MT:小中桃恵、蕭定弘 AT:全員	MT:小中桃恵、蕭定弘 AT:全員	
8/23 (土) ・お土産ランキング作成 ・形容詞の学習 ・過剰包装について	先生の自己紹介 二日目の復習 「の」と「と」を教える 数字と数量を復習する お土産ランキング	形容詞を教える(かわいい、きれい、大きい、小さい、たかい、やすい) 無駄包装の例	過度包装(白い恋人)の紹介 持続可能を考える	反省会 次の日の授業 内容の確認と 教具の準備
	MT:小中桃恵、米山茄穂 AT:全員	MT:小中桃恵、米山茄穂 AT:全員	MT:小中桃恵、米山茄穂 AT:全員	
8/25(月) ・果物の単語学修 ・環境にやさしい旅行を考える	先生の自己紹介 三日目の復習 果物の単語(いちご、れもん、みかん、すいか、りんご) 環境と旅行	日焼け止め エネルギー 交通手段 環境問題 環境にやさしい取り組み	文法(○○に行きますか) 旅行を計画する グループ活動 振り返り	反省会 次の日の授業 内容の確認と 教具の準備
	MT:坪井咲乃、李柔葳 AT:全員	MT:坪井咲乃、李柔葳 AT:全員	MT:坪井咲乃、李柔葳 AT:全員	
8/26(火) ・5日間のまとめ ・発表	先生の自己紹介 四日間の復習 グループ活動	日本語キャンプのテーマを振り返り 自分のキーワードを作りと練習	キーワードを発表 修了式	反省会
	MT:蔡宇涵、蕭定弘 AT:全員	MT:蔡宇涵、蕭定弘 AT:全員	MT:蔡宇涵、蕭定弘 AT:全員	

クラス1のテーマは「旅行を通じて環境について考える」であった。旅行で引き起こされる様々な環境問題を紹介し、最終日は学習者に印象深いことを発表してもらうという授業計画であった。

既習者クラスの授業概要（『「日本語キャンプ」報告書』p.59～60 より抜粋）

2025年 IIクラス 日程と担当一覧

全体のテーマ： 地球温暖化と日本の夏

	1 限目 9:00～9:50	2 限目 10:00～10:50	3 限目 11:00～11:50	午後 14:00～
8/21(木) 地球温暖化を知る	自己紹介 名札づくり 夏の楽しみ方	あなたの夏について 日本の気温の変化を知る	夏の甲子園球場の対策に関して学ぶ 「昔は～でしたが、今は～です」の文型を学ぶ	反省会 二日目授業準備
	MT:佐藤永 AT:張本薪	MT:佐藤永 AT:張本薪	MT:佐藤永 AT:張本薪	
8/22(金) 地球温暖化と異常気象	山林火災と大雨 「～と比べて」の文型を学ぶ	地球温暖化が米に与える影響 「～ために」の文型を学ぶ	家畜・動物への影響 二日目のまとめ	反省会 三日目授業準備
	MT:里見和奏 AT:鄭惟仁	MT:張本薪 AT:鄭惟仁	MT:里見和奏 AT:鄭惟仁	
8/23(土) 地球温暖化の原因と影響・身近な対策を学ぶ	地球温暖化について →CO2が増える私たちの行動・習慣を振り返る 「～ています」の文型を学ぶ	熱中症など人体への影響について学ぶ 「～くなります」 「～になります」の文型を学ぶ	日本と台湾の熱中症対策について知る 台日比較を通して温暖化対策について学ぶ	反省会 四日目授業準備
	MT:松浦泰征 AT:張本薪	MT:松浦泰征 AT:張本薪	MT:松浦 AT:張本薪	
8/25(月) 地球温暖化の	ウォームアップ 私の地球にやさし	台湾の地球温暖化対策	提案の発表 台湾のオンライン学	反省会 五日目授
政策と対策	い活動(宿題発表) 日本の地球温暖化対策の例 政策の分類	「～(する)+といいと思います。」 あなたの提案を考える	習 地球温暖化クイズ イタリヤの教育政策	業準備
	MT:横江隆弘 AT:鄭惟仁	MT:横江隆弘 AT:鄭惟仁	MT:横江隆弘 AT:鄭惟仁	
8/26(火) 2050年を想像してみよう!	これまでの振り返り 発表準備(アイデア出し)	発表準備(ポスター作り、発表原稿作り)	発表準備 発表 修了式	反省会
	MT:後藤愛佳 AT:張本薪	MT:後藤愛佳 AT:張本薪	MT:後藤愛佳 AT:張本薪	

クラス2では、「地球温暖化と日本の夏」というテーマで、自身の経験を振り返りながら「知ること」と「考えること」を目標として取り組んだ。台日比較を通じて得られた新たな知識や気づきをグループや全体に共有した。最終日には5日間で学んだことについて、「2050年を想像してみよう!」をテーマにポスターを作成し、発表してもらおうという授業計画だった。

3. 台中日本語教室見学

米山 茄穂

① 台中 YMCA

台中 YMCA では、中級クラスの授業を見学した。平日の午前が開講されているクラスであり、学習者は主婦や定年退職者の方ばかりであった。授業では、ことわざや「～とは思えない」という表現について学んでおり、学習者が考えた文章を実際に発表する場面もあった。1 時間ほど授業見学を行った後、3 つのグループに分かれ、交流活動を行った。自己紹介のあと、互いに質問をしたり、会話を楽しんだりした。学習者の日本に対する関心の高さには驚かされた。何度か日本旅行の経験がある学習者もいて、日本や台湾のことについて話題が尽きなかった。



② 東區長青学苑

長青学苑は、台中で開かれている高齢者向けの日本語教室である。実習生の自己紹介のあと、日本語キャンプで行った授業内容をもとに、授業をさせていただいた。拙いところもあったが、学習者の方が意欲的に取り組んでくださり、ありがたかった。

その後、学習者が用意したお菓子や果物、手料理の説明を受けたり、味の感想を伝えたりした。どの方も楽しい雰囲気の中で話をしてくださり、嬉しかった。日本旅行の思い出について書いた文章を準備し、思い出を伝えてくれた方もおり、様々な話題について話すことができた。



4. 帰国報告会

後藤 愛佳

① 概要

11月5日(水)13:10~14:10、大学の異文化交流スペース CroCuS にて、日本語教育実習(国外)の報告会を行った。

PowerPoint を用いて台湾で行った日本語学習キャンプ、台中市の日本語教室や高校訪問、観光などの活動の様子に加え、実習の概要(費用、日程)についての報告をした。残念ながら、未習者クラスを担当した2人は参加が叶わず、既習者クラスを担当した3人で報告会を行った。下の写真がその様子である。

来場者は日本語教員課程に興味があり、国外実習への参加を検討している方が多かった。発表後の質疑応答の時間には、いくつかの質問があり、私たちの経験や思いを次の世代へと伝える良い機会になった。この報告会を通して知ったことを参考にして、今後の国外実習参加を前向きに考えてもらえたら良いと思う。



② 告知ポスター

以下は、帰国報告会の告知のために作成したポスターである。

日本語教育実習（国外） 帰国報告会

日本語教員課程には、「日本語教育実習（国外）」という選択科目があります。
今年8月19日～9月2日の約3週間、台湾で実習を行いました。
報告会では、実習での経験や裏側などなど、幅広くお話しします。

■日時 2025年11月5日(水) 13:10～14:10
■場所 E棟2階 CroCus

日本語教育について知りたい方、来年参加を考えている方、
台湾に興味がある方など、気軽にご参加ください！
もちろん、日本語教育について知らないけど、
少し話を聞いてみたいという方も大歓迎です！！

授業担当者：東弘子教授
実習参加者：ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻 米山茄穂、横江隆弘
中国学科 後藤愛佳、小中桃恵 国際関係学科 里見和奏

③ PowerPoint スライド

以下の資料は帰国報告会で使用したスライドである。

 <p>日本語教育実習 (国外) 報告会</p> <p>2025年 11月5日(水) 13:10-14:10 記録2階CivOcas(愛知県立大学長久寺キャンパス)</p> <p>講師: 愛佳, 小中 栞亮, 重見 和史, 堀江 隆弘, 米山 恭輔</p> <p>1</p>	<p>概要</p> <p>日本語教員課程の選択科目 「日本語教育実習 (国外)」</p> <p>日程: 2025年8月19日~9月2日 (15日間) 場所: 台湾 台中市、南投縣 メンバー: 実習生5人+東先生 (日本語キャンプは、甲南大学と台湾・東海大学と合同)</p> <p>2</p>	 <p>目次</p> <ul style="list-style-type: none"> 渡航前の準備 日本語学習キャンプ 台湾の日本語教室訪問 学校訪問・日本文化体験 台中・九族文化村観光 <p>3</p>
<p>渡航前の準備①</p> <ul style="list-style-type: none"> ガイダンス...スケジュールや費用、奨学金などの説明 渡航の準備...飛行機の予約、保険加入、危機管理セミナーの受講 オンライン会議での授業づくり ...東海大学での実習において甲南大学や東海大学の学生とオンラインで授業をつくる <p>4</p>	<p>渡航前の準備②</p> <p>費用(概算)</p> <ul style="list-style-type: none"> 飛行機代: 約7万円(各自手配) 宿泊費: 5.5万円(相部屋) 共通経費(食費・観光入場料・訪問先お土産等): 約2.5万円 海外旅行保険: 約0.8万円 その他 個人経費(朝食代など) プラスα円 →約16万円+α <p>5</p>	<p>日本語学習キャンプ</p> <p>クラス1 未修者</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象: 日本語を初めて学ぶ学習者 テーマ: 旅行を通じて環境について考える 授業内容: <ul style="list-style-type: none"> 1日目 30音・あいさつ・数字・環境に関する単語 2日目 注文の日本語・食べ歩きのごみ問題 3日目 ランキングの発表・包郵とごみ問題 4日目 場所の表現・エコツアーズを考える 5日目 授業で学んだ印象深い日本語の単語の発表 <p>6</p>
<p>クラス1 未修者 授業の様子</p> <p>授業で使ったスライド...</p>  <p>教室の様子 最終日の発表 2日目の観光市場の様子</p> <p>7</p>	<p>日本語学習キャンプ</p> <p>クラス2 既修者</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象: 日本語能力試験N5からN1までの幅広い日本語レベルの方、17歳から70歳まで幅広い年代の方が参加 テーマ: 地球温暖化と日本の夏 授業内容: <ul style="list-style-type: none"> 1日目 自己紹介・イベントの変化 2日目 異常気象～食・動物への影響～ 3日目 熱中症対策 4日目 想和温暖化対策 5日目 2050年の地球を想像しよう <p>8</p>	<p>クラス2 既修者 授業の様子</p>  <p>グループLINEを注用して写真を共有</p> <p>自身の経験を交えて説明</p> <p>...ポスター作りの様子</p> <p>9</p>
<p>台中YMCA-台湾の日本語教室訪問①</p>  <p>授業見学 学習者の方との交流</p> <p>10</p>	<p>長青学苑-台湾の日本語教室訪問②</p>  <p>授業の機会をいただきました!</p> <p>学習者が用意してくれた食べ物をいただきながら交流しました</p> <p>11</p>	<p>国立暨南国際大学附属高等学校訪問</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己紹介と大学紹介 学生による台湾紹介 日本文化体験(折り紙)  <p>12</p>

台中観光

- お買い物
- 観光地・夜市巡り
- 織物体験「台中市織維工芸博物館」
- 学習者の方とお出かけ



13

九族文化村・日月潭観光

- 遊園地
- 原住民の文化体験



14

ご清聴ありがとうございました。

15

Q&A

16

17

18

5. 実習生ふりかえり

国外実習を通しての人との関わり

後藤 愛佳

学んだこと

日本語キャンプでは、一から自分たちで授業を作り上げる必要があり、台湾に行く前のオンライン会議や、台湾で日付が変わる時間まで続いた打ち合わせなど、大変なことも多かった。私は5日目の授業を担当していたため、出発前にある程度の枠組みは考えていたが、4日目までの授業内容を踏まえた最終発表が必要だったため、完全に決定することができなかった。そのため、1日目、2日目の授業が進むなかで徐々に内容を固めていった。実際の授業では、「時間が足りない」ということを強く実感した。学習者の日本語能力の把握や時間配分が甘く、時間内に収めることができなかったからだ。しかし、学習者の皆さんや仲間のサポートもあり、何とか最後までやりきることができた。発表の時間に、学習者の皆さんが楽しそうに取り組んでいる姿を見て、とても嬉しく感じた。私は高校での3週間の教育実習に参加した経験があるが、今回の日本語キャンプでは「自分たちで授業を作り上げる面白さ」や「状況に応じた柔軟性の重要性」を改めて学んだ。教室は指導者1人で成り立つものではなく、学習者と共に作り上げていくものだ実感した。そして、その場にいる全員で、その時にしか生まれない学びの場をつくることができると感じた。

また、YMCA 教室見学や長青学苑・高校生との交流など、授業以外の活動にも多く参加した。共通して言えるのは、どの活動でも参加者の方々が非常に積極的で温かかったということだ。私たちを歓迎し、台湾の食べ物を準備してくれたり、歌を練習してくださったりと、多くの時間を使って迎えてくださった。日本への関心の高さを嬉しく感じるとともに、台湾の方々の温かさに触れ、改めて台湾が大好きになった実習であった。

感じたこと

今回の実習を通して、最も印象に残っているのは「人との関わり」である。私は台北に1年間留学していた経験もあり、大好きな台湾にまた行けることが国外実習に参加した理由のひとつだった。しかし、その気持ちだけでは乗り越えられない場面も多かった。そのような時に力をくれたのが、人とのつながりである。留学時にも日本語を教える機会があったが、今回の実習では、老若男女さまざまな立場の学習者と関わることもできた。学習者とは中国語で話すことが多かったが、自分から積極的にコミュニケーションを取るよう意識することで、相手もたくさん話してくれるようになり、距離が一気に縮まった。その関係は、指導者と学習者という枠を超え、「1人の人間同士」として関わることもできたように思う。この多くの人との関わりが楽しさややりがいとなり、実習を支える原動力になった。さらに、学習者だけでなく、先生方の支えや、同じ実習生との励まし合いも大きかった。国外実習に参加したからこそ得られた人との出会いやつながりがあり、それが今でも続いていることをとても嬉しく思う。

国外実習を終えて

小中 桃恵

キャンプを通じて感じたこと

この実習を通して、授業づくりと協働の重要性を実感した。最初はオンラインで旅行と環境をテーマに授業内容を検討した。しかし、学習者がどのように発話できるかを意識しながら構成を考える作業は予想以上に難しかった。先生方から助言を受け、学習者の立場に立って内容を再構成する必要を痛感した。準備には多くの時間を要し、台湾到着後も夜遅くまで修正を重ねた。

授業本番では、時間配分や指示の出し方の難しさを改めて感じた。進行が想定通りに進まない場面もあったが、AT (Assistant Teacher) と協力して柔軟に対応することができた。また、回を重ねるうちに、私たちと学習者の関係、そして学習者同士の関係が深まり、教室の雰囲気も和らいだ。このことから授業は一人ではなく、AT や学習者との協働によって成り立つものだと実感した。

また、AT として授業を支援した経験から、学習者の理解や関心の変化を細かく観察できた。以前の教育実習では一人で授業を行ったが、今回はチームで意見を出し合い、相談しながら準備を進め、心強さを感じた。MT (Main Teacher) として前に立つ緊張と、AT として支える視点の双方を経験できたことは大きな学びだった。日本語キャンプを通じて、準備の大切さ、協働の大切さ、そして学習者の意欲に支えられて授業が成立するという実感は貴重な経験となった。

日本語キャンプ後は、台中市の YMCA 教室見学や、長青学苑での授業、高校生との交流という、さまざまな活動を経験した。YMCA では学習者の日本語力が高く、質問が途切れないほど意欲的で、その熱心さに刺激を受けた。長青学苑で授業を行ったときは、日本語キャンプとほぼ同じ内容の授業を実施したが、時間配分や、説明の仕方などが異なり、学習者によって授業の雰囲気や進行が大きく変わることを実感した。授業の進め方に不安もあったが、それでも学習者が前向きに参加してくれた姿に大きく励まされた。

実習全体を通じて感じたこと

この実習全体で、授業を担当するだけでなく、準備や交流を通して多くの人と関わる中で、自分自身の言語との向き合い方にも変化があった。

私は以前、台中に留学したことがあり、今回は二度目の滞在だった。留学時は学ぶ側として台湾を楽しむことが中心だったが、今回は実習として来たことで、授業を作るために中国語をどう使うのか考える時間が多くあった。そして、子どもから高齢者まで幅広い年齢や様々な仕事の人々と関わる中で、言葉だけでは思いが伝わらず、相手の言葉を受け取る力や、状況に応じて柔軟に伝え方を変える必要があると気づいた。

今回の実習は、実践を通して授業に関する多くの学びを得ると同時に、自分が取り組んできた言語学習の視点からも、たくさんの学びがあった。今後は、今回学んだことを糧にして、相手の立場に立ったコミュニケーション能力を高め、自分の言葉で人とつながれるようになりたい。

台湾での二週間をとおして

米山 茄穂

日本語キャンプ

私はクラス1の3日目の授業をメインティーチャーとして担当した。しかし、自分たちで教案をつくることは、想像以上に難しい作業だった。教案づくりは行き詰まるときも多くあり、「学習者にどんなことを学んでほしくてこの活動をするのか」、「どんな力をつけてもらいたいのか」という視点が抜けていると指摘していただいたこともあった。台湾でクラス1の実習生や先生方に手伝っていただき、なんとか授業を終えることができたが、もう少し日本で懸念点を解消できれば良かったと思う。授業の中では、指示内容が不明確で上手く伝わらないことがあり、急遽 AT (Assistant Teacher) に説明を助けてもらうこともあった。また、活動が想定より早く終わってしまった時があり、臨機応変に対応するのが難しかった。その中でも、学習者のあたたかさに助けられたと思う。初日は緊張した様子も見受けられたが、日に日にみんなが活発に意見を交わせる良い雰囲気が作られていった。例えば、年齢や学習歴の差がありながらも、学習者同士が助けあいながら学習を進めていく姿が見られた。この雰囲気のおかげで、安心して授業を行うことができた。

その他の活動

日本語キャンプの後は、YMCA や長青学苑の見学、暨南国際大学附属高校での高校生との交流を行った。YMCA や長青学苑では、学習者のみなさんの日本への関心の高さに驚かされた。YMCA では日本語を長く勉強している学習者が多く、流暢な日本語で台湾での生活や日本に関する経験について教えてもらった。また、長青学苑では、日本語キャンプで行った授業をもとに授業をする機会をいただいた。日本語キャンプとは違う反応が返ってくることも多く、新たな発見をすることができた。また、授業の形態や学習者に応じて、教材のレイアウトや課題の伝え方を工夫する必要があると分かった。

印象に残ったこと

台湾では想像以上に日本や日本語が身近に存在していることが印象的だった。例えば、たくさんの学習者が日本への旅行経験を話してくれた。また、同年代の学習者や東海大学の学生は、日本のアニメや音楽に関心を持っていた。加えて、スーパーマーケットの商品や店舗の看板、若者向けブランドの服などに日本語が使われているのを多く見た。

また、日本語キャンプの後半で、何人かの学習者が翻訳アプリや授業で使った表現を用いて話しかけてくれたことも印象に残っている。「日本語を使って伝えたい」という気持ちや、日本語学習にとって大切なのだと実感した。

台湾に実際に行ったからこそ、たくさんのことを学ぶことができた。本当に参加して良かった。

日本語教育実習(国外)を終えての所感

横江 隆弘

日本語教育実習(国外)は、夏季集中講義のはずである。しかし、実態は、5月末の三大学の顔合わせから始まるのである。だから、台湾に行くこともできるし、日本語教員課程の唯一の選択科目単位をこの科目で取ろうと思っている貴方、楽しんで単位を取るつもりなら、受講を再検討することを勧めたい。

日本の社会問題をテーマにしながら、日本語を教えるという試みの大変さをよく理解しないままにスタートします。オンライン会議が進むにつれて、不安が募ります。日本語を教える授業もしたことがないままに、ぶっつけ本番で、台湾で授業を行うなど無謀なことだと気づいた時にはもはや後戻りできなくなっていた。しかし、苦勞をした仲間は徐々に団結していき、自然と暖かい居心地の良い空間に包まれていきます。同じ実習生だけでなく、拙い私たちの実習に5日間もお付き合いしていただいた台湾の親切なやさしい学習者の方々と一緒に過ごすことができたのは、何物にも代えがたい経験であったと思う。

学習者の方々は、年齢も異なり、日本語のレベルも様々であり、各々の日本語学習の目的も違っているほか、視覚障害者の方もいらっしゃるなど、毎回授業の内容を全員にうまく伝えるためには、主担当の先生のほか、各グループのサブの先生の臨機応変な努力が必須となっていたため、絶えず緊張感をもって臨んでいなければならず、毎日授業後はぐったりと疲れていた。

しかし、実習後の休日に、学習者の方がドライブに誘ってくださり、素敵な山中のカフェや台中の夜景を堪能したことで、疲れも消えてしまった。

その後は、東先生が入念に準備された訪問先で、日本語を学んでおられる方々と交流した。YMCA、長青学苑の社会人や年配者の方、繊維博物館の先生、スタッフや工芸を学びに来られている方の共通点は、皆さんがとにかく明るいこと、突然の来訪者を誕生日会に招いていただいたり、食べきれないほどの名物を並べて歓迎していただいたりしたのは、忘れられない思い出になった。また、新学年の始業式の日には訪問した高校生たちが、夏休み期間を使って私たちが歓迎するために準備してくれたことにも感謝したい。最初は、照れてはにかんでいた子どもも少なくなかったが、授業後にはとても人懐っこい様子で記念写真を撮っていたのは、とても微笑ましかった。

とにかく、大変な実習ではあるが、努力したら努力した以上に、大きな成果を得られる貴重な体験になると思うので、ぜひみなさんも挑戦してほしいと言いたい。

国外実習を通して得た学びと成長

里見 和奏

異文化での生活と日本語キャンプから得た学び

今回の国外実習では、異文化の中で生活し、現地の人々や学習者との関わりを通して、多くの気づきと学びを得ることができた。初めて訪れる土地での生活は想像以上に戸惑うことが多く、バスの乗り方や料金の仕組みがわからなかったり、トイレにティッシュが備え付けられていないことに驚いたり、日常の些細な場面で文化の違いを強く実感した。最初は行動に躊躇することもあったが、次第に違いを楽しむ余裕が生まれ、異文化に柔軟に向き合えるようになった。

授業準備と活動は決して簡単ではなく、夜遅くまで作業が続き、体調が万全でない状態で次の日の授業に臨むこともあった。それでも先生方や仲間が支えてくれたおかげで、最後まで前向きに取り組むことができた。MT (Main Teacher) として前に立って行った授業に対する反省点は沢山挙げられるが、最後に学習者が「楽しかった」と笑顔で伝えてくれたことが大きな励みとなり、さらによい授業を作れるように精進しようと思った。

人との関わり・交流から得た学び

実習中、台中 YMCA で出会った学習者との交流は特に心に残っている。授業のあとに「LINEを交換したい」と声をかけてくださり、帰国後も日本語で丁寧なメッセージや動画、写真を送ってくださった。さらに、私が送ったメッセージに対して「教室のメンバーにも共有します」と言ってくださったことで、一度会っただけの関係で終わるのではなく、この出会いを大切に、これからもつながりを持ちたいと考えてくれているのだと感じ、胸が温かくなった。

また、交流を通して私自身も、これまで知らなかった日本の魅力や文化の違いについて新たに学ぶことができ、視野が広がったと感じている。こうした経験から、「言語」は単なるコミュニケーションの手段ではなく、人と人を結びつける架け橋であることに改めて気づかされた。文化を理解しようとする姿勢や、違いを尊重する気持ちがあっこそ、本当の意味での交流が生まれるのだと思った。

異文化の中での生活は決して楽ではなかったが、困ったときに助けてくれる人がいて、笑顔で受け入れてくれる人がいたからこそ、乗り越えることができたと感じている。今回の実習で、人との関わりの中で自分は育つということを学んだ。文化や言語の違いに戸惑いながらも、人の温かさに支えられて前に進むことができた経験は、これからの人生の大きな財産になると思う。感謝の気持ちを忘れず、今回出会った人々とのつながりを大切にしながら、異文化を理解し合える人であり続けられるよう精進したい。

編集後記

編集委員 太田 真緒

この度は『2025 年度日本語教育実習（国内・国外）報告書』をお読みいただき、誠にありがとうございます。これまでの一年間の活動内容や実習生の思いが皆様に伝わっていましたら幸いです。

私は編集委員として本報告書の原稿作成や編集に携わらせていただきました。編集をするにあたって、我々実習生がこの一年間でどれだけの貴重な経験をさせていただいたのか可視化されるとともに、これまで日本語教育実習にご協力いただいた皆様への感謝の思いを実感いたしました。本実習を通して得た学びは単に日本語教育の現場だけで活かすことができるものではなく、多文化共生が進む社会の中で多様な方々と協力しながら生きていくために必要な能力でもあります。活動を通して、非常に価値のある時間を過ごさせていただきました。

本実習の実施、及び本報告書の作成にあたり、終始ご指導くださいました指導教員の先生方に、心より御礼申し上げます。また、貴重な実践の機会と多くのご示唆をいただいた愛知県立大学留学生向け日本語授業のご担当教員の先生方、貴重なご講義を賜りました外部講師の先生方、ならびに実習の場をご提供くださり、温かく受け入れてくださった地域日本語教室の皆様、厚く御礼申し上げます。最後に、本実習を通して出会った実習生の皆様と支え合い、学びを深めることができたことに感謝いたします。

今後とも愛知県立大学日本語教育実習へのご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

編集委員 橋本 佳澄

『2025 年度日本語教育実習（国内・国外）報告書』をお読みいただき、ありがとうございます。本報告書にまとめられている活動一つひとつは、いずれも実習生にとって初めて向き合う課題や学びに満ちたものであり、試行錯誤を重ねながら積み上げてきた成果です。教室内での実践にとどまらず、講演会への参加や地域日本語教室での活動など、手探りの連続でしたが、実習生同士で意見を交わし、互いに支え合いながら取り組む中で、かけがえのない経験を積むことができたこと、本報告書の編集を通して改めて実感しました。日本語教育実習を通して、学習者一人ひとりの背景や思いに耳を傾け、ともに考え続ける姿勢の大切さを学びました。本実習で得た学びは、今後日本語教育に携わる場面に限らず、多様な人々と関わるあらゆる場面においても活かされるものだと感じています。

本報告書が、日本語教育実習に関わってくださった皆様にとって活動を振り返る一助となるとともに、これから日本語教育を学ぶ方々にとって実習の姿を具体的に思い描くきっかけとなれば幸いです。本実習を通して多くの学びと気づきを得る機会を与えてくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

2025 年度日本語教育実習（国内・国外）報告書

2026 年 3 月 15 日発行

発行： 愛知県立大学日本語教員課程

編集： 太田真緒、橋本佳澄

編集指導： 東弘子、千葉月香

〒480-1198 愛知県長久手市茨ヶ廻 1522-3

愛知県立大学

e-mail: nihongo@for.aichi-pu.ac.jp

本報告書は、令和 7 年度愛知県立大学「日本語教員課程実施事業」経費により刊行されました。